

鴨東通信

冬

2015.12 No.100

通巻100号記念号



思文閣出版

平安王朝の葬送

死・入棺・埋骨

龍谷 寿著

▼四六版・三〇〇頁／本体三、七〇〇円

【1月刊行予定】

◎本書では、日本古代摂関・院政期の天皇（桓武・安徳天皇）と貴族の葬送儀礼における具体相をさぐり、その相違点を考察する。
 ◎一九九三年以来、数次におよんだ国際日本文化研究センターでの共同研究「公家と武家」における報告・論文を中心にまとめ、新稿「院政期の天皇」を収録。
 ◎平安王朝の死、入棺、葬送、埋骨の様相を通覧することから、皇権の在り方を考える。平安朝史研究にながくたすざわり、精通した著者によるこころみの一書。
 ◎土葬から火葬への変遷が一覧できる表を付載。

◆予定目次◆

第一章 摂関初期の天皇の葬送

- 一 桓武・仁明天皇
- 二 桓武天皇／平城天皇／嵯峨天皇／淳和天皇／仁明天皇
- 三 文徳・醍醐天皇
- 四 文徳天皇／清和天皇／陽成天皇／光孝天皇／宇多天皇／醍醐天皇
- 五 朱雀・村上天皇

第二章 摂関盛期の天皇の葬送

- 一 冷泉・円融・花山天皇
- 二 一条・三条天皇
- 三 後一条天皇
- 四 後朱雀・後冷泉天皇

第三章 院政期の天皇の葬送

- 一 後三条・白河・堀河天皇
- 二 鳥羽・崇徳・近衛天皇
- 三 後白河天皇
- 四 二条・安徳天皇
- 五 二条天皇／六条天皇／高倉天皇／安徳天皇

第四章 貴族の葬送

- 一 九世紀の状況
 - 藤原冬嗣・良房・基経とその近親
- 二 一〇世紀の状況
 - 藤原忠平とその近親／藤原安子／藤原氏と木幡墓地／源保光
 - 藤原定子／婉子女王
- 三 一一世紀前半の状況
 - 藤原道長とその近親
- 四 一二世紀後半の状況
 - 藤原師実の墓参／源師房
- 五 一二世紀前半の状況
 - 藤原師実／藤原苺子／藤原俊家とその近親／源麗子／藤原幸子
 - 藤原寛子／藤原璋子／藤原顕頼／藤原全子
- 六 一二世紀後半の状況
 - 藤原宗子／藤原泰子／藤原得子／藤原基実／平盛子／平滋子
 - 藤原聖子

付表（平安時代の天皇葬送一覧）
 付図（平安京図・天皇陵墓地図）

おぼろや・ひさし……一九三九年生。同志社女子大学名誉教授。



1



2



3

1. 宇多天皇陵 2. 藤原詮子供養塔 3. 近衛天皇陵（いずれも著者撮影）

『鴨東通信』一〇〇号の刊行にあたって

思文閣出版広報誌『鴨東通信』の創刊は、平成三年（一九九二）一月、当時は今と違いB5判二色刷り、八頁でのスタートでした。

以後、三か月ごと、一年で四冊を刊行し、このたびちょうど四半世紀の節目を迎えることができました。これもひとえに皆様のご支援の賜と存じ、厚く御礼申し上げます。

古書肆として創業した弊社は、昭和四五年（一九七〇）頃から出版事業に乗り出し、稀覯本の復刻事業を行ってまいりました。やがて学術・専門書籍の企画出版に本腰を入れ、その広報媒体として、『鴨東通信』を創刊するに至りました。

それから二五年、この間の出版業績については、各界で高い評価をいただき、思文閣グループの経営理念である「日本の優れた文化を育み、伝え、広めることにより、一人でも多くの人々に、感動と豊かな心を与え続ける」という言葉通り、文化水準の向上に、微力ながら寄与できたかと存じます。

翻って出版業界全体の売上は、平成八年（一九九六）をピークに落ち込むいっぽうで、出版不況と呼ばれる冷たい嵐が吹き荒れています。弊社もちろん寒さに凍えるひとりです。

インターネットの普及をはじめとする、現代社会のコミュニケーションのあり方が大きく変化し、伝え広めることがいとも簡単になったことが影響しているのは間違いないかもしれませんが、書籍という形あるものの信頼性は、逆に高まっているようにさえ感じます。人類が築き上げてきた叡智を伝え、創造していくうえで、「紙と文字」の力を信じ、書籍を通じて知る喜びを伝えるため、出版事業に邁進する所存です。

今後ともご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

株式会社 思文閣出版

代表取締役社長 田中 大

本づくり 温故知新

新連載…本の出版地として知られる京都の、故くして新しい、本づくりの現場をレポート！

コロタイプ工房から美の継承者へ

べんりどう
便利堂

記念すべき第一回目にご紹介するのは、明治二〇年（一八八七）創業、二〇一六年で創業一三〇年を迎えられる「株式会社 便利堂」さん（以下、便利堂）。ミュージアムショップなどで販売される、便利堂製の絵はがきやグッズをお持ちの方は多いのではないのでしょうか？ 便利堂では明治以来のコロタイプ印刷技術が継承されています。

コロタイプ印刷技術の遺産

コロタイプは本来一色刷りの技術で、一九世紀に写真の印刷技法としてフランスで開発され、便利堂では明治三八年（二九〇五）のコロタイプ工房開設以来、技術が継承されてきました。コロタイプ自体は卒業アルバム作成などにもみられる技法でしたが、ローコストかつ効率的な印刷技法の普及とともにコロタイプ業者は激減、世界では現在、便利堂をふくめ２社（いずれも京都）のみとなっています。

コロタイプ印刷は、簡単に説明すると以下の工程で進められます。

【撮影】複製する原本を大型カメラの四色フィルターで原寸大撮影（写真①）。

【製版】製版技師がほぼ手作業で一色ごとのフィルムにレタッチ（塗り込み）する。色見本を確認しながらニスや鉛筆で塗り込む、繊細をさわる作業。

【刷版】ガラス板に感光材を含むゼラチンを塗って製版済みのネガフィルムを密着させ、紫外線で焼き付け。コロタイプの「コロ」とは、カラーゲンの「コラ」と同じ語源で「膠」すなわち「ゼラチン」に由来し、刷版工程にゼラチンを使うことから命名された。

【色校正・印刷】試し刷りをして色校正後、一色ごとに手差し印刷（写真②）。

すべての工程を見学させていただきましたが、まず注目は撮影室で拝見した年季の入った大



②手差し印刷中。印刷紙（和紙）やインキは特注のものを使用



①原寸大撮影用大型カメラに載せられた原板



宮内庁書陵部編『花園宸記』(コロタイプ複製、1992～2015年刊。原本は宮内庁書陵部蔵)



便利堂の原板庫

型カメラの迫力もさることながら、ずらりと並んだ写真原板。これらの中には「法隆寺金堂壁画写真原板」八三枚があり、そのうち四色(カラー)分解写真原板は、昭和二十四年(一九四九)に炎上し焼損する法隆寺壁画の元の彩りを伝える唯一の原板として、学術的価値が高いとされます。戦時中は京都大原の三千院に疎開させるなど、厳重に保存・管理されてきました。製版、刷版、印刷工程では、それぞれ専門の職人さんが、その工程ならではの手の込んだ作業を、途方もない時間をかけて行っていました。この手間のかけ方がコロタイプ独特の表現の豊かさや暖かみを生み出しているものと、納得。

美術の複製から創造へ

便利堂に明治末期から文化財専門のカメラマンと写真工房が備えられた背景には、明治初期の廃仏毀釈をうけての文化財の記録撮影実施の流れがあったとのこと。この流れは複製事業として、現代に受け継がれています。

小杜出版物の刊行においても、大変長い間、お世話になりました！今年七月刊行分で完結した『花園宸記』全三五巻は、コロタイプ多色印刷の技術なくしては存在しない製品といっても過言ではありません。昨春秋には便利堂本社附属のギャラリーで特別展示されましたが、天皇宸筆の巻物が身近に手許で見られるという複製技術のありがたさ、もつと見直されてもよいのではないのでしょうか。

デジタルなものであふれる現代において、アナログの極致ともいえるコロタイプ印刷は、他の印刷技術には代えられない表現力や魅力をもっているといえます。その表現力や魅力をいかした創造的事業として、昨年からはコロタイプ技法を使った国際写真コンペティション(HARBAN AWARD)が催されています。

今回の取材を通して、コロタイプ技術の古さがつまみを感じました。まさに、温故知新！興味をもたれた方は、ぜひ便利堂主催の研究会「コロタイプ技術の保存と印刷文化を考える会」で工房見学会も開催されるそうなので、お問い合わせください。次回は平成の経師「株式会社大入」さんです。お楽しみに。

株式会社 便利堂

京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町302

☎075-2314351(代)

思文閣出版 思い出の一冊

『鴨東通信』一〇〇号記念特別企画として、読者の皆様から思い出の本をご紹介します。

ありがたいことに、予想以上に多くの方々から寄稿いただきました。小社が四〇年以上にわたって刊行してきた書籍の一冊一冊が、読者の人生に影響を与え、大切にされてきたことを、直接に感じることができました。ご寄稿いただいた全ての方に、心より御礼申し上げます。

できるだけ多くの思い出を掲載させていただくため、いただいた文章を削らせていただいた場合もございます。なにとぞご理解のほど、お願い申し上げます。

◎表記方法◎

書名 編著者名 刊行年

*印の書籍は現在品切れ

※書名の五十音順に配列

※コメントの末尾に、(お名前・お住まいの都道府県・年齢・ご職業等)の順に表記

※思文閣古書目録・思文閣美術館図録などは省いた

※アンケート期間：二〇一五年七月一六日～一〇月三十一日

晶子と寛の思い出

与謝野光 一九九一

思い出の本を書庫から出してきて、あらためてなつかしくページをめくっています。もともとずっと古い本も書庫にはありまして、しばらくいろいろ手に取りました。

秋田県教育史

(青木毅・七六歳・岡山県)
戸田金一 一九八四

東北六県教育史だけでもそろえたかったなあーと思って悔やまれます。東北六県の近代化が遅れたのは、「藩校と人材養成の後進的な教育の姿勢」に有ると思っていますからです。特に伊達藩の岩手山の藩校や会津藩の日進館を見て感じました。この後進性が五〇年(半世紀)の

遅れを生んだと思っています。

(鈴木英機・七四歳・秋田県・無職・元教員)
安房妙本寺日我一代記 佐藤博信 二〇〇七

富士門流の大本山安房妙本寺日我について、「いろは字」辞書は知られていたが、上人の生涯が本書により克明にかたられた。戦国期における国主里見義堯との関係、国衆である正木氏との関係が詳細に知らされ貴重な書籍であった。

(鈴木恒雄・七二歳・千葉県・農業)
医界風土記 全6巻

日本医師会編 一九九四～九五※
幕末・明治の医学界人物史を研究しているが、包括的な人物史が見付からず、探して居た処、

本書があり、大いに役立った事に感謝している。

（梶谷恭巨・六八歳・新潟県・退職者）
錨をあげて 本井康博 二〇〇七

新島襄の生涯にはとても興味がありません。これらの中の一冊である。リベラストとしての新島襄の思想が良く理解出来る様になっている。

（寺田正稔・奈良県）
いけばなに見る日本文化→8頁

石山寺の信仰と歴史 綾村宏編 二〇〇八
紫式部ゆかりの寺院としてどうしても理解しておかなければならないと思いましたが勉強になりました。

（山口尚・七〇代・茨城県・無職）
一千年目の源氏物語 伊井春樹編 二〇〇八
研究者の方々の素直なお話がとても参考になりました。伊井春樹氏解説・加賀美幸子氏朗読のNHK「古典講読・源氏物語、千年紀・選」を全帖聞きましたが、この番組開始まえの両氏の話が特に参考になりました。



（山口尚・七〇代・茨城県・無職）
祈りの文化 信多純一 二〇〇九

大津絵について初めて本格的に学んだ書。

（露口香代子・五〇代・大阪府）
岩倉具視関係史料 全二巻 佐々木克他編 二〇一三

従来の日本史籍協会編の同名（文書）を補う史料集として、一部分、協力をしながらも多くの論文（解題）を発表することができた。逆に『文書』によって『史料』では解釈不十分な内容を明らかにすることもできた。今後も岩倉関係の史料研究（歴史的事実）がさらに推進されとともに、幕末・明治史の史料学研究に資するであらう。

（杉谷昭・八八歳・福岡県・佐賀大学名誉教授）
器を楽しむ 逸翁美術館編 二〇一五
阪急電鉄の創設者・小林一三氏の茶会席で用いた器などを豊富な写真と資料で紹介している一冊です。逸翁美術館で企画展を開催されていたのは知っていたのですが、時間が合わず見に行

けませんでした。しかし、この本のおかげで小林氏が集めた茶器などがカラー写真で掲載されており、さらに会記として誰を招いてどの器でどんな料理を提供してもてなしたかがわかり、大変見応えのある本でした。また、実際に料理を盛り付けての写真も多くわかりやすいものです。論説においては小林氏の食に関する考えなどがわかりやすく書かれており、実際に美術館へ行つたような気分で見終えました。コンパクトで中身が濃くお勧めの一冊です。

（芝原良宏・三八歳・京都府・会社員）
江戸期文化人の死因 杉浦守邦 二〇〇八
七〇歳を過ぎた頃より、身内・友人等の死に接する事が多くなりました。そんな折に読んだ本書。まずタイトルの『死因』というのに興味を持ちました。日記・書簡などは当然ながら、肖像画等からというのはいすししたミステリの謎とさのようで面白かった。（庵原直子・七五歳・静岡県・ミステリーサークルSRの会）

江戸湾をめぐる中世 佐藤博信 二〇〇〇

中世江戸湾における、諸氏の攻防・利害関係が理解される名著であった。

愛媛県教育史 (鈴木恒雄・七二歳・千葉県・農業) 影山昇 一九八三

愛媛大学教育学部在任中に執筆しただけに思い出が強く残ります。シリーズ全巻が完結しなかったことだけが残念です。現在でも愛媛県関係の方からの問い合わせがあり、手元にあるものは届けております。その後、東京水産大学(現・東京海洋大学)に転出し、充実した研究生活を送ることができました。おかげさまで、今春の叙勲で、「瑞宝中綬章」を受章することができました。(影山昇・八〇歳・神奈川県・東京水産大学名誉教授)

王権と神祇 今谷明編 二〇〇二

本書に収められている、伊藤聡「中世密教における神道相承について―特に麗氣灌頂相承血脈をめぐって―」は、中世の宗教思想に興味を持つ私にとって参考となる。(京都府)

王朝千年記 槇野廣造 二〇〇一*

著者は、道長の幼少期九七十年代と、青年期であった九八十年代の事件と人間のからみあいとをすでに二冊の本にまとめられた。ここでは、九九十年代を「永祚二年(九九〇)一条天皇御元服、御年十一、中宮定子入内」から「長保二年(一〇〇〇)皇后定子葬送(六波羅蜜寺・鳥

戸野)」までを対象とする。

登場人物は五十余名。彼らを囲む、祭、行幸、五節の舞、相撲など、十余の項目におよぶ内外の儀式。まさに、点としての人物と、面としての豪華な儀式の絡み合いで十年をえがく。それらは、『枕草紙』をはじめとして、その傍証としても読める『栄花物語』、『行成権記』など貴族たちの日記類、それに、『大鏡』など沢山の歴史書からの引用で成り立っている。

(工藤一郎・八二歳・京都市・中国文化史) 近江の歴史と文化 木村至宏編 一九九五*

この度の「読者アンケート」企画に接し、二〇年前の一コマを思い出しました。本書(木村至宏先生還暦記念の出版)に原稿を出すようにとのお誘いを受け、当時、書きためていた原稿など無く、急遽、手元にあった史料(五人組帳)を整理分析し、やつとの思いで「近世末期の坂田郡醒井村における譜代下人の存在」という論考をまとめた時の苦勞です。何かをするには、切羽詰まらなないと、なかなか出来ないものです。(江竜喜之・七〇代・滋賀県・無職)

大手前大学比較文化研究叢書 二〇〇二、比較文学の様々な論文が掲載され続けて来たシリーズ本。もう一冊にもなっている。目次を繰っていると、面白い論文に出会えることが多い。大学が中心となって作る本として、高い質を保っている。

(西原大輔・四八歳・広島県・広島大学教員) 岡倉天心の比較文化史的研究 清水恵美子 二〇一二

二〇一五年夏、敗戦後七〇年を経て学徒動員された芸大生の遺作としてオペラ「白狐」の楽譜・レコードが発見されたことは記憶に新しい。岡倉の最後の著作となるオペラ台本「白狐」は「茶の本」等岡倉の一連の英文著作とは異質&異形の作品と見なされてきた。この「白狐」にまつわる二つの疑問がある。なぜポストンで書かれたのか。なぜオペラ台本なのか。「白狐」の再評価を著述の中心にすえ、膨大な資料・史料を参照・取り込んで、この二つの疑問に答えを見いだそうとした格闘の結実が本書となる。

著者が感じたポストンと日本での岡倉のイメージのズレの大きさ。それは岡倉天心と寛三の差異にも通じる。彼私の相違はなぜ生まれたのか、没後の顕彰を丁寧に通ることでのその答えをも導き出した。その結果、本書は単なる作品論に留まらず、時代を腑分けし、地域との関係性に新たな光を当て、岡倉の思想の核心に踏み込んでいる。

本書に呼応する形で翌年「五浦の岡倉天心と日本美術院」があらわされた。著者の関心は時代も人物も抜け、より大きな領域を対象としつつある。だが博士論文をほぼそのままの形で出版した本書は、著者の岡倉研究の出発点であると

ともに、今後の研究者にとつての里程碑となり得ている。現在執筆中の近著では岡倉の弟で英語教育に尽力した由三郎を取り上げ、一九三〇年代の日米文化交流に果たした役割と兄弟の思想的影響関係を明らかにするという。

著者のこれからの研究に注目するとともに本書がより多くの読書人に知られることを期待したい。

岡田章雄著作集

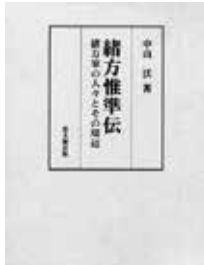
V 三浦按針

岡田章雄

一九八四*

この書を基本文献にすえ、W・アダムスこと三浦按針の日本での足跡をたどった。按針は日英交流の原点ともなる人物で、まずは日本橋の屋敷跡からはじまって神奈川の「按針塚駅」（京浜急行線）、造船ゆかりの地・伊東、そしてリーフデ号漂着の地大分へと各地をめぐるものも懐かしい。この書が今は絶版とはさびしい限り、再版を切に願っている。

（佐藤快和・七〇代・東京都・著述業）



緒方洪庵の蘭学
洪庵勉強会で読本に。

石田純郎編著 一九九二

緒方惟準伝

（神村勝一・七九歳・大阪府）

中山沃 二〇一二

大部の書物であり国会図書館で読んだのですが、永年消息を確認したかった緒方一族の方々のくわしい情報を知ることが出来、大変感謝した次第です。こうした地味な専門的な書物も学術の発展のためには是非今後とも世の中に出版していただきたいですよう希望しております。

岡山県古文書集

全四輯

（五〇代・茨城県・団体職員）

水野恭一郎他編

一九八一*

私が学生の頃には、すでに旧版（3冊本）の入手が困難であり、思文閣出版から刊行された新版も同様の事態であった。思文閣版は近隣の公共・大学図書館にも所蔵されておらず、古書価も高くて入手に苦労した。あるとき、古書店で相場より安価（とはいえ私にとっては高価だった）で入手し、その後、赤松氏、浦上氏、宇喜

多氏の論文を執筆できた。ありがたい本である。その後、岡山県の中世史料は新たに発見されたものも多いので、もう一度増補改訂版の刊行をお願いしたいところである。

（渡邊大門・四〇代後半・千葉県・作家）

岡山県の教育史 ひろたまさき他 一九八八
恩師の先生方と共著で書かせて頂いた。私の書いたところは不出来だが、他の先生方の部分はすばらしく、今も基本的文献となっている。

（匿名）

岡山和歌俳諧人名辞典

直原正一 一九九二

私は短冊収集が趣味であるが、この直原氏には共感する所、大である。妻の談話が実によい。思文閣様は、この種の地味な研究成果に目配りができる、本来の出版の目的がしっかりと確立されていて、実にすばらしい。

（高市俊次・六七歳・愛媛県・神職）

増補 陰陽道の神々 斎藤英喜 二〇一二
古記録、古代文学には、陰陽道神が、頻繁に記述されておりますが、それらの実体について、

どのように調査すべきか（研究書の有無、論文等）、小生の長年の課題でした。待望の書です。本書は今後の課題追及に明解に道筋をつけてくれました。本書を基盤として、さらに深く追及させて頂きます。貴重な蔵書の一つです。

（黒部俊夫・七〇代・埼玉県・薬剤師、技術士）

手軽に陰陽道の神々に関して、調べられる本がほとんど無い中で、とても便利な座右の参考書であり、また楽しく読める良書です。

（六〇代・奈良県・大学教員）

回想・杉浦重剛

回想杉浦重剛編集委員会編 一九八四

大津市の歴史散歩の際に杉浦町というのに気が付き、杉浦重剛旧宅を見学、その後に修論指導に係わり杉浦が登場。本書を読む機会に恵まれた。杉浦が若い頃にイギリスへ留学中に、化学雑誌に学術論文を執筆したことに感銘、本書の重厚さに感動した。

（後藤正人・七〇代・京都府・法制史研究者）

海国日本の夜明け↓14頁

隔頁記 全七巻

赤松俊秀校訂・『隔頁記』研究会編 二〇〇六

何といっても総索引が付されているのが嬉しい。近世初期の文化サロンの実態を知る上で大いに役立っている。

（露口香代子・五〇代・大阪府）
花道古書集成『復刻』 全五巻
華道沿革研究会編 一九七〇

続花道古書集成 全五巻

続花道古書集成刊行会編 一九七二

いけばなにみる日本文化 鈴木榮子 二〇一一
いけばなに身を置いて久しい。指導する立場になって十年経つころから、何百という流派のある花道界の、一流派に身を置く自分を客観的に見る事ができるようになった。また、外国人生徒たちの質問や反応を見るなかで、いけばなの本質とは何だろうと疑問を持つようになった。我が家の家庭環境が整った頃、一念発起して学生に戻り、いけばな修業の合間に日本文化の研究もするようになった。

「いけばなとは何だろう」「いけばなと非いけばなの差異は何だろう」この疑問を解決するには、継承されてきたいけばなの思想に当たらなければ始まらない。いけばな伝書の多数に目を通す必要がある。思文閣出版の『花道古書集成』五巻、『続花道古書集成』五巻を図書館で見つけたときは、嬉しかった。必要な巻を借り、貪り読んだ。

実は、『専応口伝』や『抛入花伝書』は他の日本文化の専門書にも取り上げられている。筆者の懇切丁寧な解説が書かれているものもあり、それらも参考にさせていただいた。しかし、学

者の解説の中には実践する私の眼には机上の論に思えるものもあり、それらを吟味することにも時間がかった。思文閣の『花道古書集成』に取り上げられている花伝書は、当時の文をそのまま書いてあるだけなので、私は実践者として素直に読み進めることができた。巷の文獻に名前だけ出てくる花伝書の大半が、『花道古書集成』シリーズには原文で、挿絵もそのまま所収されている。文字や絵を追うと、当時の花飾りの立場や状態が想像でき、形態の変化だけでなく、社会の動きと絡んで形態を変化させてきた花飾りの思想も見えてきた。博士学位論文を纏め上げることができたのは、これらシリーズのおかげである。

博士学位を授与されてから数年後、研究開始からは十年ほど経っていたある日、指導教授の神戸大学名誉教授倉澤洋行先生から、博士論文をもとにして出版することを勧められ、出版社を紹介すると連れていかれたのが思文閣であった。「あの出版社だ!」。私の胸は躍った。

二〇一一年二月「いけばなにみる日本文化」——明かされた花の歴史」が出版された。一介の主婦の私が、こうして文化度の高い思文閣出版書の著者として、花道界きつての先生方に並び名を残せることをありがたく、誇りに思う次第である。
（鈴木榮子・広島県）

かぶき論叢

郡司正勝 一九七九*

学部生時代に大学生協で購入したと記憶する。

何と言っても装丁に惹かれた。今手元にある本

は箱はさすがにヤケているが、表紙の黒地に露

芝文様は瀟洒で鮮やかなままだである。「妹背山」

道行の求女の衣裳によると「あとがき」にある

が、こうしたセンスは到底他人が真似できるも

のではない。「取り柄といえは、苦しんで書い

たものは一つともないところ」と、おっ

しゃるが、改めて読み返してみても、いまだに

教えられる内容に富む。浮世草子を研究する者

としては、芸能と文学の関わりについて、まだ

まだ研究の余地があると思ひ知らされる。自身

の浅学を恥じつつ、今後とも邁進したいと思

いを強くした。

紀伊古代史研究

栄原永遠男 二〇〇四
(倉員正江)

栄原永遠男先生には、その精緻な実証論文に魅

了され、かつて条件が許せば師事したいと希望

したことがあるほどであった。幸い東京に内地

留学された折りに面識を得ることができ、今日

でも折に触れてご指導頂くことがある。印象深

い多くのご著書のなかでも、『和歌山県史』か

ら生成された『紀伊古代史研究』は、かねてよ

りこうありたいと願う大きな目標である。深く

地域史に沈潜しながら、単なる地域史に留まら

ないその叙述は、以前参加させて頂いた自身の

地元の県史の叙述への「お手本」であり「見本

であった。未だにその叙述の後塵を押し続けて

いるが、いずれ匹敵できるものをお目にかけら

れたらと、悪あがきを続けている。(関口功一・

五六歳・群馬県・群馬県立前橋工業高校)

喫煙伝来史の研究 鈴木達也 一九九九

世界喫煙伝播史 鈴木達也 二〇一五

両著とも従来パイプ書籍から掘下げた内容で良

い。(藤谷雅洞・七二歳・兵庫県・書人)

宇賀田為吉『簞録研究』以来、煙草の伝播につ

いて改めて検証した記念碑的名著だと思いま

す。さらに今年、続編も出されたとのことで、

著者の熱意に圧倒されます。煙草文化よ、永遠

なれ。(三〇代・大阪府・会社員)

吉備と京都の歴史と文化

水野泰一郎 二〇〇〇

古代末期から近世にかけて、広く武家時代の政

治や文化を研究されてきた著者が、郷里の岡山

県吉備地方と学生時代や教員生活を送られた京

都にちなんだ歴史、文化そして古寺探訪、また

人物評伝などの多彩な業績をまとめたものであ

る。いまは絶版になっている論文集と合わせて

読むことで、その研究されてきた過程が、一層

明確になると言える。

(きつちー・五〇代・京都府・大学職員)

木村兼葎堂 大阪歴史博物館編 二〇〇三*

二〇〇三年(平成一五年)は、一八〇二年(享

和二年)に没した木村兼葎堂の二百年忌辰に相

当する。これを記念して、大阪歴史博物館では

特別展を開催した。公立博物館でははじめての

企画で、博識無比の兼葎堂に迫るべく、松浦清

氏はじめ学芸員の総力を挙げて、その人物像の

再構築に努めた意欲的な内容で、以来、この図



録は堂主の顕彰に志すわたくしの、座右の冊となっている。

(水田紀久・八九歳 大阪府・元関西大学教授)

~~~~~

『日本随筆大成』所収の「兼葭堂雜録」は高校生頃に読んで心に留め、後年「笹魚」の部分を国際学会で引用発表したりした。それ以来ある程度「知己」とも考えていたこの人と仕事に関する展覧会の図録だが、たいへん良く出来ていて、楽しく繰り返し眺めている。

世肅さんは、収集と調査でも業績を挙げているといえるが、彼を中心とするサロン形成がやはり何と言ってもすばらしいことだ。これによって多くの人が、すぐれた仕事を進めたこと、疑いのないところである。サセックスでアフリカ研究のサロンを形成していた人が、最近亡くなって、改めてサロン主催者の欠亡を悲しんでいる。(川那部浩哉・八三歳・京都府・無職) 逆欠如の日本生活文化

~~~~~

編著者園田英弘は今、この世にはいない。まさにこの一冊が園田と私をつなぐ証の本である。

平成十二年、ふとした縁で国際日本文化研究センターの共同研究チーム、園田班に誘われた。「素人が欲しいんだよ。研究者には飽きちゃってね」、園田の遊び心からだった。四年間、毎研究会ごと、日本にあるものは世界にあ

るか、を掲げて、日常生活のちょっとした話題を取り上げ、素人研究者よろしく、一人前の顔をして議論した。その結晶が、この本である。

「世界に忘年会はあるか」を園田が書き、白幡洋三郎さん(「世界に花見はあるか」、井上章一さん(「芸者とホステスと日本と」)など多士済々、懐かしい面々の小論が乗っている。恥ずかしながら、私も「連れ残業と天下り」を書いた。この本を手にとると、忽ちにしてあの頃の、あの研究会に引き込まれる。無性に懐かしさがこみ上げ、涙が頬を伝う。(引馬滋・京都府)

九州の蘭学 W・ミヒエル他編 二〇〇九

オランダ経由の学識情報の流通に漠然と興味を持ち、息抜きにと思い購入したが同書の江戸前期から幕末に至る時間軸で藩主から民間の学者等の多くの人物についての簡潔ながらも要を得た記述に惹きつけられ、一気に読了したことを記憶している。その後、同書において言及された辞書翻訳事業は自らの専門研究を進める上でも一部活かされることになったという意味においても思い出深い一冊である。

(山口亮介・三〇代・福岡県)

京都 高瀬川 石田孝喜 二〇〇五

以前から鴨川のそばを流れる高瀬川について、鴨川が近くにあるのに何故また川があるのか不思議に思っ参考書を探していたところ、貴社が『京都 高瀬川』を発行されたのを知り、さっ

そく買い求めました。高瀬川の歴史、役割、変遷等がわかりやすく書かれており大変参考になりました。また、巻末とじ込みの地図をもって現地を訪ね一層感慨を深くしました。

(森修己・六二歳・兵庫県・公務員)

~~~~~

私事ながら家の都合で、推薦を受けた大学へ行けませんでした。勤務しつつ大好きな水運史の調査研究を独学で続けました。頼りは本だけです。森鷗外の名作「高瀬舟」がとても気になっていました。貴社のお知らせでこの本の上梓を知り、即購入しました。長年の疑問が消え、対象物(船)を多くの視点から見定める研究の仕方を学びました。退職した今、本を渉猟しては、知るを楽しみ、生涯学習を地で行く毎日です。

(西口文章・六七歳・長崎県・無職)

~~~~~

(二〇一〇年某紙の企画で)三条大橋で個人旅になり、知られざる京都をと、西に歩んで高瀬川に着いた。これが鷗外の川、川幅は四〜五mほどか、四〜五〇cmと思える川底まで透明に見える、清冽な流れ、東京はもちろん私の居住地もない。「一の船入」の標示。そして対岸にはいくつかの荷を載せ高瀬舟が停泊していた(固定していた?)。

後に本書を『鴨東通信』で購入し、ただ豪商で名を残したと思い、高瀬川も単なる川としか認

識してただけに、読了後は、了以の心血を注

いだ苦闘、船運の隆盛、しかも、現在も角倉町、船頭町の地名(町名)が残っていることを知り、先人の果てしない業績、千年の都を確実に継承した京都の人たちの偉業に限りない崇敬の念を深くした。翌年、神田川湖上に発展する強烈な川である。

(渋江芳夫・八三歳・栃木県)

京都大地震

三木晴男 一九七九

一六〇年余前の文政一三年に京都を中心とした震度六・四と推定される直下型大地震があったことは無知であり、驚きの震災ドキュメント書であった。最近多発する地震、火山噴火の中で、理由ははっきりしないとしながら少なかつた火事、しかし多発した流言と予知について、改めて読み直してみたい昭和五四年発行の図書。その他、『近世京焼の研究』岡佳子著は最近読んだ図書、いつも活用している徳川黎明会編『金鯢叢書』もあげておきたい。(宮澤和夫・八〇歳・愛知県・名古屋郷土文化会会員)



京都源氏物語地図

紫式部・源氏物語編纂 二〇〇七*

今回お送り頂いた出版目録で「品切」を知った本地図。購入して良かったと快哉。「○○マップ」は、当世盛んだが、まさに出色。「源氏物語」という世界に冠たる材料をテーマにしていることと、伝統ある(千年の歴史を踏まえた)出版技術のなせるワザであらう。

京都の医学史

全二冊

(渋江芳夫・八三歳・栃木県)

京都府医師会編

一九八〇*

もう三十四、五年も前、わたくしはこの哀大な二冊を購入すべく、真冬の一日、上洛した。挿んである納品・請求書に五六年二月一二日とあるから、発行約一年後であった。たまたま百万遍でお会いした野間光辰先生から、それ、何やぐと尋ねられ、かくかくとお答えすると、医学は学問の根本やからなとひと言仰つしやつた。先生は、本書と深く関わられた山田重正博士と、御出講先花園大学でお知り合いのようで

あった。

(水田紀久・八九歳・大阪府・元関西大学教授)

京都の医学史

禅語辞典

古賀英彦編 一九九一

名家伝記資料集成↓28頁

「神護寺蔵『和気氏三幅対』の成立と訓釈」と題して、「京都産業大学論集」(人文)に執筆中である。この研究に際して、思文閣出版の書物に大変お世話になった。この出版は『京都の医学史』で、この巻頭に和気真人、時成、基成の肖像画がカラー写真で掲げられている。これは史上、初めてのことで、これに禅僧が賛偈を揮毫している。この出版に尽力した杉立義一氏と私は論議し、真人が清麻呂であることを考証した。その上、私は賛の全文を解読、訓釈、現代語訳をして、この偈が出来上がる過程、半井瑞雪の系図上の位置付け、神護寺に奉納する経緯などを明らかにした。また、賛偈(漢詩)は禅宗独自の思想により表現されている。この解釈に当って、『禅語辞典』

で類似の句を見出し、その考え方から本詩を讀み解くことができた。『禪林句集』や『句双紙』が禪語の解釈の導きとなることが意外に少ないのに、『禪語辞典』は禪語録を読む時にも手引きとして役立つ。さらに、相国寺の僧についての詳しい経歴の実証には同社の『相国寺史料別巻』（『萬年山聯芳録』）が役立った。

さらに、「座田維貞・和氣清麻呂の顕彰者」と題して『京都産業大学論集』（人文）（平二・二六年）に発表した。座田維貞は世にあまり知られていないが、幕末に学習院雑掌を勤め、和氣清麻呂の追贈に影の力を發揮した。座田に関する史料が少なく、今の時代のようにネット検索も十分でなかった時に、『名家伝記資料集成』は基礎作業において有用にはたらし、これをもとに史料を求め、順々に明らかにしていった。索引も充実して、ここで見つけられない人物は諦めるよりはかかった。同書は活字ではなく、手書きがそのまま印刷されていて、訂正の時は修正液でなく、斜線を引くという編者の苦心の作物である。（若井勲夫・七一歳・京都府・京都産業大学名誉教授）

京都の歴史災害

吉越昭久他編 二〇一二
阪神・淡路大震災や東日本大震災以来、改めて地域の災害史が注目され、歴史学・考古学・民俗学・地理学などの成果が活かされようとしている。京都に焦点を絞って叙述された本書のよ

うな書物は、あまり類書がない。大部ながら一気に通読した。市民啓蒙本とも言えるカラフルなブックレット版の刊行も望みたい。私は住まいしている地域の震災資料を二〇年間蒐集し、二件の大震災による被災私立学校の調査に関わった。調査研究報告を地域や学校に広く還元する必要性を痛感させられた。

（山内英正・六七歳・兵庫県・教育職）
増補版 京の医史跡探訪 杉立義一 一九九一＊
丁寧な現地調査で新しい史実を掘りおこしています。京都ならではの出版でありますね。

（飯塚平吉郎・七二歳・愛媛県・勤務医）

『京都の医学史』京都医師会編（思文閣出版制作）と併用して読んでいます。

京の鴨川と橋
（神村勝一・七九歳・大阪府）
門脇禎二他編 二〇〇一

当書こそ、京都の出版社である貴社にふさわしい商品だと思料致します。巷では、当書を参考文献として書かれた小説もあり、また手前味噌ながら、過日小生も同書を参考文献として、『京都・四条 Vol.50』（四条繁栄会商店街振興組合発行）の五十号記念コラムとして、「鴨川と四条大橋」というタイトルで随筆を書きました。（扇子忠・七〇代・東京都・フリーライター）
三条大橋から「かもがわ」を上った。「賀茂川」

「鴨川」と二つの名称も、分岐点を界にしていることも初めて知った。川を行くと「飛び石」が目に入った。「おみやさん」（TV）で、結末シーンに必ず登場したシーンだけに、かけ下りんばかりに「飛び石」を幼児のように行き来した。全国の川に関する本を二、三冊所有しているが、鴨川だけではないだろうか。上賀茂神社を拝んで南下、この川は〇〇大橋と名づけ、高山彦九郎、弥次喜多、弁慶と牛若九何とすばらしい橋々か。『京都 高瀬川』と同様、本書に触発されて神田川を溯上し柳橋（隅田川に合流する）から源流の井の頭池まで八回、一四〇の橋を踏破する契機となった鴨川の橋。

（洪江芳夫・八三歳・栃木県）
玉薬 今川文雄翻刻・校訂 一九九二

四男頼経を鎌倉幕府四代将軍、孫頼嗣を五代将軍に就け、自らは摂政・関白の座にあつて権勢を誇った九条道家の日記。鎌倉中期研究のための最も重要な根本史料。

（横澤信生・六九歳・富山県）
金鯢叢書→11頁

近世京都の町・町家・町家大工

日向進 一九九八
この本が出版された一七年前は、「京町家」ということは一般的ではなかった。町家の価値を再評価しよう、このままではどんどん失われ

ていく、再生に取り組もう、と人々が蠢きはじめていた。本書で、日向氏は一次資料（近江屋吉兵衛の普請関係文書など）に丹念に向き合い、近世の大功がどのように町家を建築していたかを詳細に描いている。絵図や大福工数帳を読み込んだこの内容は、本格的に町家について調べようとする者にとっては欠かせない先行研究である。京町家が注目されている今だからこそ読まれるべき一冊。（田中充・四〇代・京都府・龍谷大学大宮図書館）

近世京焼の研究 11頁

近世寺社参詣の研究 原淳一郎 二〇〇七*

長い登山史研究のなかで出会い、恩恵に与った一冊である。「日本人と山」の通観に際して、「山岳信仰」探究は避けて通れない。神仏を習合した民間信仰に基づく、講中による霊場参詣、霊山登拝が盛況を見せ、観光旅行化したのは江戸時代中期以降・末期である。その実相を把握すべく、私は浮世絵に注目した。本書は、徹底し

て文字資料に依拠して精細を極める。浮世絵への言及は見当らないが、私の疑問を解消へ導く根拠を多々提供してくれたのである。（布川欣一・一九三〇年代生・埼玉県・登山史・山岳文学研究）

近世私塾の研究 海原徹 一九九三

三〇年程以前になりますが、近世初頭の儒学者・広瀬淡窓が主宰した「咸宜園」を訪れた時に、日本の私塾について更に知りたいと希っていたところ、図らずも同書に出会い、望みが十分に満たされたことを思い出します。（匿名）

近世日本の銅と大坂銅商人

今井典子 二〇一五

過日、多田銀銅山を訪れた。江戸初期には、天領だった石見や生野の銀山に比べて影が薄かったが、十七世紀後半からは産出量が大幅に伸び、天領の仲間入りを果たした。南蛮吹によって得られた精銅は大坂銅吹屋へ送られ、銅商人たちの致富の源泉となった。現在、多田銀銅山では、青木間歩のみ観光客の立ち入りが許され

ている。ヘルメットをかぶり、中腰で、暗く細い坑道を進んだ。坑内の空気は思いのほかひんやりしており、岩壁のいたるところから水が浸み出していた。手元の同書の表紙の染みは、その時の滴のせいである。

近世の女性画家たち (福井栄一・四〇代・大阪府・上方文化評論家)

パトリシア・フィスターー 一九九四*

教科書に女性の画家が出てこないのには二つの理由があつて、一つは実際の社会状況から、女性画家になるのが困難だったこと。もう一つは、近代の美術史家が少数ながら存在した女性の画家すら無視したことである。本書は、史料を博搜して、知られざる江戸時代の女性画家たちの姿と、その作品をよみがえらせた、画期的な書。豊富な図版が載せられており、作品そのものの美しさを味わうことができる。

(野村育世・東京都・歴史研究者) 近世琵琶湖水運の研究 杉江進 二〇一一

杉江氏とは時々顔を合わせる間柄ですが、お会



いする度ごとにその誠実で研究熱心なお人柄に、いつも心に響くものがあります。

本書を出されて、その中のいくつかの論考を読み進むにつれ、氏の研究に対する真摯な姿勢に改めて敬意を表している次第です。

膨大な文献に目をおし、正確に読み解いておられますが、私が関連した論考について、その矛盾点を指摘していただいているところなど、さすがに鋭い！と感服した次第です。

(江竜喜之・七〇代・滋賀県・無職)

近世吉野林業史

谷彌兵衛 二〇〇八

数年前、畏友谷君の著書を拝読し彼の性格そのまま立派な研究成果に感激しました。小生永年の都会生活を切り上げ吉野の中山間に戻り一〇年家蔵の古文書類の整理に追われ乍ら同君の研究も利用させて頂き次代への家業並びに古文書類(県指定文化財を含む約一万点)の継承と保存にも参考になっている。又補論二、土倉家文書解説研究も非常に役にたった(同家と拙家は古い縁続き)。日本は云うまでもなく山林王国ですが、時世の推移で近代から戦後現在まで激甚な変化をこうむり、なかなか復活の糸口もつかめていないが、歴史をしっかりと見つめなおし本書がその基盤になればと念じP・Rの必要性を感じている。

(上田杉司・八〇歳・奈良県・会社社友)

近代化の推進者たち

A・パークス編著 一九九〇*

明治の近代化の車の両輪——日本からの「留学生」ならびに「お雇い外国人」の二つの領域が扱われており、私のその後の英学史研究のナビゲーターとして大いに役立った。国際学術会議でのプレゼンテーションそれぞれを編者が「一般読者の興味を引き起こそうと努めた。」おかげで全体がとても理解し易かった。

(田中正道・七〇歳代・広島県)

近代西洋文明との出会い

杉本勲編 一九八九

筆者も部分的に執筆したが、「黎明期の西南雄藩」の脇題のごとく、幕末における西欧からのインパクトを見事に消化できた。まさに近代化の先駆者たちを見出すことができる。またその基盤となった在来の技術と伝統も見逃せない。

(杉谷昭・八八歳・福岡県・佐賀大学名誉教授)

↓『海国日本の夜明け』↓『幕末軍事技術の軌跡』

(杉本勲・酒井泰治・向井晃編)を読んでください。すべて学術書です。私には分らないところがありますが、以下のように理解します。極東の日本が西洋との出会いによって西洋化↓近代化して日本国となった訳ですね。近代化するとは文明技術が必要ですね。幕府と藩とが一緒

になって「日本」という国にならなければ世界に通用しなくなるのです。

(水谷求・七九歳・京都府・無職)
近代茶道の歴史社会学↓19頁

近代新潟におけるプロテスタント

本井康博 二〇〇六

エディンバラ医療宣教団のT・A・パーム宣教師の影響の下で新潟のプロテスタント諸教会が始まった。本書はパームから始まった二つの流れを跡付けた労作であり、教えられることが多い。

(北垣宗治・八五歳・京都府・大学名誉教授)

近代の「美術」と茶の湯

依田徹 二〇一三

まとめ方が整理されていて楽しく読ませていただきました。章終の「小括」は著者の意図が良く理解できました。

(安藤喜和三・七一歳・群馬県・ライター)

くずし字辞典

東京手紙の会編 二〇〇〇

仕事柄折々に利用して大変重宝させていただいています。時間があればじっくり読んでみたいと思っています。

(鈴木公平・七一歳・大阪府・画商)

大学院時代に江戸時代の手紙を読む授業があった。当時はこの本が未刊で、難渋し、日本史専門の知人に助力を仰ぎ、何とか課題をこなした。しばらくしてこの本が刊行された。授業の担当教官も編者のお一人となっており驚いた。その後、寺院の典籍調査をする機会が何度かあ

り、その都度この本を持参し重宝した。この本の存在をご存じなかった他の調査者にも紹介したりした。二〇年前の懐かしい思い出である。

(四〇代・広島県)

古文書を学ぶためには絶対に必要の辞典です。『書文化史』と対を成す。『書文化史』のなかに信長の自筆書状があります。信長の直筆の唯一のもので。原本も視たことがあります。信長・花押もない書状です。でも信長の書状です。朱印状はありますが信長自筆ではないです。『書文化史』を視ればわかります。是非購入して見てください。

(水谷求・七九歳・京都府・無職)

有名人の筆跡が沢山収録されているので、古文書解説作業に大変役に立ち、ありがたく思っております。

(高田豊輝・七八歳・徳島県・年金生活)



熊沢蕃山の研究

宮崎道生 一九九〇*

万葉歌枕で知られる南山城鹿背山(木津川市)に、江戸時代の儒学者・陽明学者熊沢蕃山が幕府からの圧迫を逃れて一時居住していたことを調べるにあたり、大いに参考にしたのが、新井白石の研究で知られる故宮崎道生氏の名著『熊沢蕃山の研究』であった。わたしは蕃山の鹿背山居住を中心にして一文をまとめ、同人誌に掲載したが、宮崎先生は鹿背山には訪ねておられないのではないかと思います、その同人誌をお送りした。折り返し手紙が来て鹿背山に行きたいとの連絡が入ったのである。こうして宮崎先生と鹿背山住民との交流が始まり、つごう4回東京から来られ、そのたびに宮崎先生による蕃山についての講演会が開かれ、鹿背山の守る会代表の故福本彰氏の豪壮な旧家に泊まれた。そのたびにわたしも一夜を共にしてさまざまな教えを乞い、またいろいろ語りあったものであった。『熊沢蕃山の研究』の一書が、わたしにとっては思いがけない忘れられない本となったので

ある。(齋藤幸雄・七〇代・京都府・無職)

軍医森鷗外のドイツ留学 武智秀夫 二〇一四
特に第一章「ミュンヘンでの論文」「ビール利尿作用」は興味深く読みました。

(岡節男・八四歳・千葉県・税理士)
源氏物語千年のかがやき

国文学研究資料館編 二〇〇八

源氏物語の全体像を理解するのに役立ちました。画帖の絵で当時の生活が実感でき、原本の写書状況説明、各帖のまとめ等勉強を始めたものとして助かりました。

(山口尚・七〇代・茨城県・無職)
源氏物語の地理 角田文衛他編 一九九九

京都源氏物語地図↓11頁

二年に一度、福岡県の国語の高校教員による京都臨場研修がある。縁あって、私はその案内人となって、六回が過ぎ、次は七回目となる。第四回の源氏千年紀にあたる平成二〇年(二〇〇八)の旅は、やはり源氏ということになり、人気があったのか、二十人をはるかに上回る参

加者を見た。

勿論、事前に私が三月頃より資料作成、冊子作りをする。この源氏千年紀の時に大いに役立ったのが、標記の二著である。『地理』のほうは、資料作成および案内の中身(内容)において、地図のほうは、実際のその場での実地研修の説明や場所のイメージ作りにおいてである。が、『地図』のほうは、ややまちがい(誤字、場所の表記ちがいなど)が多く、残念である。使用には注意が必要である。ともあれ、この二冊は、今後も、この京都研修における有力な武器であるのは、間違いないことであろう。

(小田剛・六七歳・兵庫県・前龍谷大学研究員)
元伯宗旦の研究 中村静子 二〇一四

千利休の孫として、江戸時代初期に茶の湯を継承した元伯宗旦の人脈を知るには格好の研究書です。
(北口勝彦・五〇代・愛知県)

講座日本茶の湯全史 全三巻

茶の湯文化学会編 二〇一三〜一四
茶の湯のもやもやがふつとびました。
(澤田享子・六〇代・富山県)

茶道をより深く知りたいと思う内容が系統だつて満載されていて、この書籍に出合え、とても嬉しく思っています。
(西範子・七一歳・富山県)

コンパクトに出来ているが、内容はよくまとまっていると思う。

(佐藤直樹・六七歳・東京都・自営業)
口頭伝承と文字文化 笹原亮二編 二〇〇九
文字と声の問題は、民俗学の本質に連なる重要な問題であるが、この問題をさまざまな角度から論じた本書は、研究の水準を一步高めたものといえる。
(六〇代・奈良県・大学教員)
増訂 古画備考『復刻』 全四巻

朝岡興禎 一九七〇*
かつて武内範男氏が思文閣出版に勤務されていたころ、二人でよく古書について語りあった。『仏教考古学』もそうであるが、『古画備考』に言及した。その後寺社参詣曼荼羅を研究することになり、その制作者について本書は座右の書となっている。

(根井浄・六〇代・長崎県・元龍谷大学教授)
古記録と日記 全二冊 山中裕編 一九九二
本書は解説と論文としていづれも間然する所なき好著として現在なお机辺においてしばしば見る時も少くない
(匿名)

古代日本の衣服と交通 武田佐知子 二〇一四
衣服を案内役として、中国との関係にも視点を向け、古代国家の形成がダイナミックに叙述されており、一氣に読んでしまった。巻頭の写真は理解を深めるのに役立った。
(井上昭・六六歳・大阪府・公務員)

古代日本の生命倫理と疾病観

大星光史 二〇〇五

高校時代の恩師の著作である。先生は文学者ながら、文学系としては非常に数が少なく、取得には苦労されたとのことであるが、医学博士号をもっておられる。文学の研究を通じ、早くから地球環境、自然農法、健康問題に関心を示されてきた。本書は大変壮大なテーマについて、古代人の生き様から学ぼうとしており、現代人の忘れたものを思い出させてくれる。現代批判の書ではないとのことながら、人間のあるがままの姿、大宇宙における人間の存在、生きがいといった点を深く考えさせられる。というよりも現代の社会にあつて失われたものが取り戻され、自然との共生、ヒーリングの世界に浸ることのできる一冊である。

(新保芳栄・六七歳・東京都・大学非常勤講師)
西鶴の文芸と茶の湯 石塚修 二〇一四
大阪市の上町台地を案内する際、西鶴の墓があるのので、その地での西鶴の話をする時に役立ちます。(長田光男・八九歳・奈良県・大和郡山市文化財審議会会長)

『作庭記』と日本の庭園

白幡洋三郎編 二〇一四

小野・飛田氏により近年の研究成果をすることができた。大阪の某書店になく(新刊のわりには)、京都の貴社へ直接購入。

(斎藤隆・六四歳・富山県・年金生活)
ジャポニスム入門

ジャポニスム学会編 二〇〇〇

一九九〇年代、ジャポニスム学会の前身、ジャポネズリー研究学会が運営に苦労していた頃、私は世田谷美術館の遠藤望さんと実行委員や理事として学会誌の編纂から庶務までを引き受け孤軍奮闘していた。その最中、思文閣の後藤美香子さんから、ジャポニスム事典編纂の提案を受けた。私の関西出張に合わせて大阪や京都で後藤さんと打ち合わせをした記憶がある。その時は会の運営に手一杯であったため残念ながら見送らざるを得なかった。

その後ジャポニスム学会と改称するのを機に、事務局が新しいメンバーに変わったのを機に「ジャポニスム入門」として一六章の大項目を立てて二〇〇〇年に刊行され、私も「日本美術の海外流出」を担当させて頂いた。幸い唯一のジャポニスム啓蒙書として七刷を重ねている。当初、事典を目指す企画だったので、私の手元

には試行の項目の選択や、草稿のノートが残されている。「ジャポニスム事典」の企画の再生が期待される。(小林利延・八〇歳・栃木県・文芸芸術大学名誉教授)

十九世紀日本の園芸文化 平野恵 二〇〇六*

古文書等で変化朝顔を知り、種を入手して育てています。その後近世について色々勉強を始めました。その時出会ったのがこの本でした。とても解りやすく資料も多彩とても楽しく読んでいます。

(松本裕子・五六歳・愛知県・会社役員)
莊園制成立史の研究 川端新 二〇〇〇*

前途を嘱望されながら、平成一年に三四歳で没した日本中世史研究者の遺稿集。領域型莊園の立莊プロセスを鮮やかに解き明かした名著。

相国寺史料別巻 萬年山聯芳録↓12頁
(横澤信生・六九歳・富山県)

正倉院展六十回のあゆみ(発売のみ)

奈良国立博物館発行・編集 二〇〇八

ここ数十年、勤務先の「日本文化システム史論」という授業科目で、正倉院宝物の成立から、戦後の正倉院展の開催までを一五コマで、講義しているが、講義に登場する宝物の出陳状況やその特徴、なによりもポスターや入館券にみられる意匠・デザイン・色配りなどに時代の変化があり、脱線の挿話の材料を提供してくれた大変ありがたい書物であった。最終の講義を控え、感謝したい一冊である。(西別府元日・六四歳・広島県・広島大学大学院文学研究科教授)

先日、「第六七回正倉院展」を参観した。この三〇年、秋の恒例行事になっている。その記録がぎっしりと詰まっている本書は、自分のアルバムを見えるような気持ちで時々開いては、当時の自分と合わせて思い出して楽しんでいる。

(濱田尚文・五五歳・千葉県・高校教諭)



織豊期主要人物居所集成

藤井讓治編 二〇一

戦国時代に活躍した有名人の動きが詳細に把握できる有用な研究書(しかし、北政所の「京都新城」とは何処だろうか?)

(北口勝彦・五〇代・愛知県)

織豊期の茶会と政治 竹本千鶴 二〇〇六*

綿密な資料調査による論考で、信長と秀吉の茶の湯の状況が具体的に描かれ、たいへんに参考になりました。

著者自身のお話によると、何校も校正をされたとのこと。そうした著者の意欲を尊重して、校正を重ねる余裕を持つ思文閣出版ならではの成果と思います。誤りのない研究と言うのは難しいと思いますが、少しでも良い研究成果を、まして研究初心者が得るためには、校正を重ねることも非常に意味のある、有難いことと思います。

書の文化史

(岩間真知子・東京都)
波多野幸彦 一九九七

筆跡の書風から人を読むのは危険だが、本書は書状の内容とその表現から筆者の人を読んでいて、なるほどと思った。史料による客観的な裏付けも好感が持てた。「書は人なり」という言葉が、身近に感じるようになった。(二〇代)

読解の難しい書簡を本書で学ばせてもらった。

(露口香代子・五〇代・大阪府)

~~~~~

有名人の書状の写真と解説文が沢山収録されているので、大変参考になります。初心者にとっては少しむづかしいレベルでしょう。

(高田豊輝・七八歳・徳島県・年金生活)

## 神仏習合の歴史と儀礼空間

嵯峨井建 二〇一三

今日さまざまな場で目にする儀礼作法は、週ればどれも神仏に対する心構えが基となり発展してきたものです。神に対する作法があり、仏に對する作法があり、それらが混じり合った空間ではどのような作法を行うべきか。神社側、寺院側、また宮中儀礼の中心地であった京都など様々な場を事例に挙げ、過去の聖職者たちなどのように作法を形作ってきたかを知ることができ一冊です。

また、神仏習合の信仰について取り上げたものは多くありますが、儀礼から考えるという視点の本は初めてでしたので、その点でも本当に興味深く読ませて頂きました。

(朝倉ゆき・三〇代・京都府)

## 神名の語源辞典

志賀剛 一九八九\*

こちらのことも色々述べられています。鵜呑みするのは危険なレベルと思います。参考にはなります。

(高田豊輝・七八歳・徳島県・年金生活)

# 精神病医齋藤茂吉の生涯 岡田靖雄 二〇〇〇

本書は、歌人として高名な斎藤茂吉ではなく、精神病医の茂吉に対して、終始一貫して批判的に論じている。それは医者たる筆者の自戒をこめて、茂吉の病者への差別意識という観点に基づくものである。この点については、さらなる検証が必要であろうが、精神病者への差別・排除の超克を考えるに刺激的な書であった。とくに、戦前の精神病院(脳病院)、精神病者について貴重な情報を得ることができた。

(小泉博明・六〇歳・東京都・教員)  
世界喫煙伝播史↓9頁

## 戦国期権力佐竹氏の研究

佐々木倫朗 二〇一

戦国期東国の都市と権力 市村高男 一九九四  
戦国期関東公方の研究 阿部能久 二〇〇六  
これまでもあまり刊行されていなかった茨城県(常陸国・下総国北部 関係の研究者による論文集として、刊行が待ちどおしく、内容的にも自分の関心事と重なる点があり、うれしく感じた。欲を言えば、常陸北部と陸奥南部とを一つの地域として取り上げ、テーマ設定をしたもの等も刊行されてほしい。

(笹岡明・六〇代・茨城県・無職)  
禅語辞典↓11頁

宗達伊勢物語図色紙

羽衣国際大学日本文化研

究所伊勢物語絵研究会編

二〇一三

何と言ってもこの一冊です。年金生活者には少し高い買物でしたが実物が届いたときの感激！美術書などに比べたら良心的とも言えると思います。すべてカラーで原寸大というのがうれしく一気に目を通したあとも何度もお気に入りの場面を味わっています。他作品との比較、特徴の説明なども丁寧で本当に良い本を出して下さったと感謝しております。

(西尾順子・六七歳・大阪府・主婦)

魂の指定席

本井康博

二〇〇九\*

本書は新島との関係で、新島の母校たるアーモストはもちろん、ウィリアムズ、ハーヴァード、イエール、プリンストンの諸大学、又日本の慶応義塾や日本女子大学についても論じている。新島がめざした同志社のモデルは、アーモストだったか、それともハーヴァードだったか？その問題に著者は見事に答えている。

(北垣宗治・八五歳・京都府・大学名誉教授)



茶人と茶の湯の研究

熊倉功夫

二〇〇四\*

初めて御社で拙稿を載せて下さった書。大切な思い出もあり、これを初心として今後も励みたい。(市村祐子・四五歳・岡山県・無職)

茶道と恋の関係史

岩井茂樹

二〇〇六

近代茶道の歴史社会学

田中秀隆

二〇〇七

茶道の本場である京都の出版社ならではの二冊です。近世以前、男の社交であった茶の湯が、近代に女子教育にとりいれられて女子のお稽古事となる変化は、日本の女性史、文化史を考える上でも大変重要な変革であり、その後、思いがけず同志社大学京都と茶文化研究センターのセンター長をつとめるようになる前に、新島八重と茶道との関係を考えるために拝読しておりました。チュラーロンコーン大学に勤務されていた岩井先生とは、タイでお目にかかったこともあり、ご縁を感じる二冊です。(佐伯順子)

茶の医業史

岩間真知子

二〇〇九

茶に関する記述有る限りの醫業書をよくぞばかり丹念に御調査、のみならず御解讀なされた

ものである。「茶の寒と温の性質」の「現代でも等閑視できない」とのこと迄が納得せらる。

一般に、今や、中國茶といへば烏龍茶だの鐵觀音茶だのが思ひ浮べられて居れども、實は「中國のはは全域で多量に飲まれているのも緑茶である」との指摘には目の覺させらるる思ひがする。(山口公和・五八歳・福岡県)

以前お茶を習っていたという程度の事で興味を持った。

(堀部正行・七四歳・東京都・歯科医師)

茶の湯交遊録

小林一三と松永安左門

逸翁美術館他編

二〇一三

私も表千家の茶の湯を永く稽古してきました。このため、小林一三氏には尊敬と憧れを抱き、彼の著作「大乘茶道記」を愛読してきました。また、逸翁美術館へ行き、彼の美意識に触れることができました。今回茶の湯交遊録を拝見し、松永耳庵の茶にも触れることができ有意義でした。特に茶道具は美術館に展示するのは

なく、実際に使わないとその価値はわからない  
と思われれます。今後、思文閣はその橋渡しがで  
きるよう努力されては如何か。

(山本進一郎・七三歳・岡山県・無職)  
茶の湯文化と小林 一三

逸翁美術館編 二〇〇九  
新装開館を記念した展覧会の図録。逸翁の茶の  
湯と人となりがよく分かる図録で、阪急文化を  
創り上げられた様子も分かる。

(市村祐子・四五歳・岡山県・無職)  
茶の湯 連翹抄 戸田勝久 二〇〇五

戸田先生のご研究の集大成。先生がおみ足で、  
眼で集められた史料を駆使され、ご研究を積み  
上げられている。茶道史研究には必携の書。

(市村祐子・四五歳・岡山県・無職)  
中世後期の香文化 本間洋子 二〇一四

香道の発生期とされた中世後期にあつては、既  
存の香道史には登場しない人物、むしろ政治史  
や他の文化史で著名な人々や歴代天皇によつて  
香文化は支えられ発展していったとの記述に感  
銘を受けました。(稲垣弘明・四〇代・東京都・  
京都造形芸術大学非常勤講師)

中世寺院社会と民衆 下坂守 二〇一四

これまでの寺院史・宗教史に欠落していた民衆  
(衆徒・馬借)のすがたが明らかにされ、しか  
も前著『描かれた日本の中世』(法蔵館)にみ  
られる著者の絵図分析論により具体的な中世寺

院社会を知ることができる名著である。

(赤井達郎・八八歳・京都市)  
中世寺領荘園と動乱期の社会

熱田公 二〇〇四  
紀州の南部荘は私の誕生地であることから興味  
深く学ばせていただきました。

(京都西山短期大学学長)  
中世民衆生活史の研究 三浦圭一 一九九〇\*

地域の人々を中心にすえた歴史叙述がまぶし  
かった。こうした研究が積み重ねられていけ  
ば、あかるい未来が築けるに違いないと思つた  
が、どうやらそれほど現実とは甘くなかつたよ  
うだ。(時枝務・五〇代・群馬県・立正大学教授)

貴社から初めて購入した思い出深い本です。  
(佐々木亨・東京都)

思文閣出版発行で最初に購入したのが、立命館  
大学の恩師である三浦先生の本です。今日まで  
何回か手に取るごとに温厚な先生の姿が浮び、  
非常に思い入れのある一冊です。

(沓掛英人・六七歳・長野県)  
月を愛する 逸翁美術館編 二〇一四

アメリカに滞在した著名人(忘失)が、月見を  
しようと車に乗つたら、(現地)米人が「どち  
らへ」と尋ね、「月見に」と答えたら「月はこ  
こでも見られる」と怪訝な面持であつたと書い

ていた。さもありなん。「月を愛する」中国人  
も有していようが、それ以上に日本人がもつ豊  
かな感性であろう。それが本書で更に認識を深  
めた。まず題名がよい(私もそれで購入したの  
だが)。上弦の七日月、更待月の二十日月など  
初めて知つた言葉。十六夜(いざよい)は「い  
さよう」「いざよう」から、「月忌み」から「月  
見」に変わったという。古典から蕪村まで、更  
に本書は「詠む」「描く」「作る」「飾る」「奏で  
る」をテーマとした展覧会の図録とのこと。「観  
たかつた」「観たかつた」痛惜の感じきりであ  
る。(洪江芳夫・八三歳・栃木県)

鉄道日本文化史考 宇田正 二〇〇七

思文閣出版には珍しく私の好きな「鉄道」に関  
する書籍です。一見すると大学論文図書の様で  
難しいのですが、ゆつくり読んでいくと明治期  
に鉄道が日本で開通し、社会や文化、産業に多  
くの変化を与えてきたことが、実例を用いて書  
かれております。特にIV章「国民教育と鉄道の  
役割」では国語教育の教科書を用いて鉄道との  
関わりが書かれており、他の図書ではあまり見  
られないテーマだったので興味深く読みまし  
た。今後「鉄道」や「交通」をテーマにした  
本が発刊されることを楽しみにしています。

(歩原良宏・三八歳・京都府・会社員)  
鉄砲 洞富雄 一九九三

量的にも内容的にも大著といつてよく、読み通

すのは容易でないが、鉄砲の歴史に関する著書は三冊目というだけあって、じつに読みごたえがある。しかし、写真や図版が多く、洞氏の著書がみなそうであるように本書も実証的な書き方により説得力を持つので、読み出すと最後まであきさせない。読了後は自分が日本の鉄砲史に関しては、ひとかどの「通」になったような気がした。

この文章を書くため、改めて洞氏の『鉄砲』をひもとくと、「はしがき」で鉄砲史の研究では第一人者と目される氏が、意外にも「少年時代から鉄砲に嫌悪の情をいだいて」おり、「(軍事教練でも)鉄砲に手をふれることを潔しとしなかった」と書いているので、驚くと同時にうれしくなった。洞氏と同様、人間が人間を標的にして撃ち合うことは絶対にやめたいと、私も強く願っている。

天下人の神格化と天皇

(石井徹・七七歳・無職)  
野村玄 二〇一五

豊臣秀吉や徳川家康など、中世のいわゆる天下人が神格化されるに至った経緯や当時の時代背

景と、神格化されることによる天皇との関係(対抗)について、深い考察がなされており、たいへん興味をもって読んだ一冊。

(北田貞雄・京都府)

秀吉・家康の神格化について、その政治的意味のみならず、彼らの後継達の国家観まで論及の対象にしているなど興味深く読んだ一冊です。

(山本博文・会社員)

天神祭 大阪天満宮文化研究所編 二〇〇一  
都市祭礼に関心をもつ者として、今だ訪ねる機会のない天神祭を知る上で大変役立った。特に美しい口絵カラー四八頁、モノクロ図版、作品解説は理解を助けてくれた。(宮澤和夫・八〇歳・愛知県・名古屋郷土文化会会員)

伝統工芸再考 京のうちそと

稲賀繁美編 二〇〇七\*

二〇〇三年四月から二〇〇六年八月まで国際日本文化研究センターが二五回にわたって開いた共同研究会の結果を、三六人の筆者が各自の研

究テーマに基いてまとめた報告の記録集。京都を中心とした日本の伝統工芸の過去・現在・将来を考えると、貴重な手がかりとなることでは空前と思われる労作。学生たちにも読んでほしい。

東寺廿一口供僧方評定引付(既刊二冊)

(匿名)

富田正弘他編 二〇〇二、

東寺百合文書のなかに東寺供僧の会議録であるこうした評定引付が大量に残っている。東寺文書がすばらしいのはこの評定引付により一通の文書の意味や他の文書の関係が花開くように明瞭に示されることにある。莊園研究でも他莊園との関係が評定引付でわかる。「足利義満権下の備中国新見莊」(岡山朝日研究紀要三三号、二〇一二年)を書いた時も、新見莊と河原城莊とを『東寺廿一口供僧方評定引付第一巻』で関連づけて論究できました。続刊を期待するとともに、最勝光院方や学衆方などのシリーズも刊行していただきたい。

(辰田芳雄・六三歳・岡山県・高校教師)



東寺百合文書（既刊一冊）

京都府立総合資料館編 二〇〇四

世界記憶遺産になったことの祝意を届けたい。二〇〇四年に第一巻が刊行されて一年で第一巻。カタカナの函の終りまでにはあと五〇年以上はかかると思われる。この仕事も次世代にバトンをつなぐなければならない。岡山朝日高校でも継続購入を決めている。私の後任の日本史の先生にこれを備える意味を伝えたい。最近、新見莊関係の文書の年代比定に時間を割いている。思いもよらないところから成功することがあるが、それはやはり東寺文書からの情報である。年貢算用状などの数字にも編者の校訂があり、省佰法による計算であることが示されるなど単に翻刻だけでない情報が盛り込まれていて、私は読物としても楽しんでいる。

（辰田芳雄・六三歳・岡山県・高校教師）

東寺百合文書を読む 上島有他編 一九九八

出版の際、資料写真の手配などで協力させていただいた。十年近く経ったとき、某大学の先生から、授業のテキストとして使っていると言われ、感激したのを覚えている。再び東寺百合文書の担当となった今も大変重宝している一冊である。（小森浩一・五〇代・京都府・京都府立総合資料館）

日本中世史をもう一度細くきつかけとなった一

冊です。

三〇年ほど前に中世史を学び、その後すっかりご無沙汰していましたが、この本をきつかけに中世の民衆の気持ちにもう一度寄り添ってみようと思い立ちました。この文書を残そうとした東寺の学僧、数々の荘園の民衆の自由への希求など実際の文書を通して伝わってきました。また上島先生はじめ編者たちのご努力に感謝するとともに、世界記憶遺産登録決定をお慶び申し上げます。（小林一・五五歳・神奈川県・会社員）

思文閣での一冊となると、どうしてもこれになる。古文書の読み方の勉強を百合文書を教材にしてここ数年やっている。文書の内容を調べようとすると、まずはじめの手がかりとなる、我々素人にとっては強力な参考書。文書のバックグラウンドを知るのに、専門の論文は検索までできて本文にたどりつけなかったり、読んでも素人にはわからなかったりする。本書のような本はありがたい。

（佐藤克則・五四歳・千葉県・自営）

東寺文書と中世の諸相

東寺文書研究会編 二〇一一

東寺文書に興味を持ったので、読んでみました。様々な中世の様子がうかがえ、東寺文書の奥深さを実感しました。

（中島学・四一歳・愛知県）

東大寺文書を読む 綾村宏他編 二〇〇一

大学院に入って買った本です。寺院史に興味があったなかで、読んでみました。写真付きで解説があり、わかりやすい本でした。『東寺百合文書を読む』も買って、みくらべたものです。

（中島学・四一歳・愛知県）

毒きのこの今昔 奥沢康正他編著 二〇〇四

「毒きのこの今昔」という題名から「毒きのこ」についての随筆集と思って購入したが、読み始めてすぐに本書が極めて優れた「毒きのこ」の教科書であることに気付いた。筆頭著者は眼科医であり、余暇に「きのこ」について研究されている。彼の「きのこ」に対する熱い思いが伝わってくる本である。

（kotaro・六四歳・東京都・会社員）

浪速の町医師 上田秋成 濱光治 一九九八

上田秋成は『雨月物語』にみる伝奇性、辛口の随筆などから、特異な性格の持主とみなされがちである。本居宣長とはしばしば国文学上の論争をしていて、「弟子欲しやの乞食伝兵衛」と揶揄していた。宣長の吉野、飛鳥、橿原巡りの『菅笠日記』を読んでいたとき、伝記類にしばしば小児科医でもあったとあり、その実態を知りたいくらい調べても確たるものはなかった。これに対して秋成の実像は非常に心温かい人物像であることが本書に刻明に描かれており、「医師上田秋成」と題した論文の体を成している

いつてよい。

(吉條久友・七七歳・奈良県・開業医)

奈良朝人物伝

林陸朗 二〇一〇

これまでも古代の人物事典は刊行されているが、本格的な研究書で、しかも基本工具としてこれほど重宝するものはなかった。関連する個々の人物の薨卒伝を読み比べていくと、歴史のドラマを垣間見る思いがする。史書のみならず古典を読むときにも座右に置いている。実証性がともなった人物史は面白い。

(山内英正・六七歳・兵庫県・教育職)

南蛮学の発見

松田毅一 先生を偲ぶ会編 一九九七\*

ルイス・フロイス『日本史』の研究でも知られる松田先生の追悼と足跡を探る記念書である。『日本史』に記す寺社について究明して以来、先生との出会いとご教示は長い。絶筆の年賀状は私の研究歴の一枚である。

(根井浄・六〇代・長崎県・元龍谷大学教授)



増補・改訂 南北朝期公武関係史の研究

森茂暁 二〇〇八

著者と私はほんの一時、職場を共にした。しかしそれ以上に共に九州の出身であり、彼の恩師川添昭二先生(現九州大学名誉教授)のお仕事でヨーロッパ研究者の私を虜にしたため、非常に森氏と親しくなった。その頃の彼の業績が今回の大作の原本であり、文献出版から昭和五九年、一九八四年に出た。その書名には「増補改訂」の文字はもろろないが、これは彼の学位論文が公刊されたのであり、著者からいただいた。その後互いに職場を別にし、またこの間ともに多事多難な出来事と無縁でなかったため、ある時期音信不通にならざるを得なかった。著者との再会を機に直ちに頂くことになったのが本書である。それは平成二〇年、二〇〇八年の刊行となっている。その主題は題名に明瞭に表れているだろう。そして昭和末年以後の著者の活躍は思文閣版の主要著書一覧が如実に示しているであろう。本書の意義は著者

にとり、その再刊にかけた意気込みにも表れているが、私にも学究に関わる姿勢を教えてくれた思い出深い著書として一言した次第である。

(学習院女子大学教授)

日仏マンガの交流

石毛弓他編 二〇一五

マンガが立派な研究対象になっていることが門外漢にもよく分かり興味深く、最後までほぼ一気に読んでしまいました。青年期に読んだマンガにこんな意味があると知ったのが新鮮です。そのうちフランスのバンド・デシネがたくさん翻訳されるようになるでしょう。

(藤田昌一・七〇歳代・東京都・土木技術者)

日蘭交流史その人・物・情報

片桐一男編 二〇〇二\*

筆者は青山学院大学文学部片桐一男教授の斡旋にて、本書に論文を採用して頂いた。一、三の新知見も含めての研究発表の好機となった。筆者は同論文を基盤に更に研究精度を深め、折から新設された放送大学大学院に進み鳥海靖教授の懇切な指導のもと修士論文を提出し

合格して同課程を終了した。進学プロセスの起  
点は上記論文の掲載にあり、思えば運命の巡り  
合わせには感謝する。

筆者が子供の頃、疎開先きの北海道函館市郊外  
では、野外で遊ぶ悪童共は害虫のブヨが汗臭を  
慕って飛来し、執拗に纏わりつく『えーエイ、  
しつこい筈だよ。エノモトブヨだもの！』と  
言って追い払う奇妙な風習があった。

箱館戦争を体験した地元農漁村民の先祖たちが  
元幕臣榎本武揚率いる旧徳川脱走軍から受けた  
苛斂誅求の過酷な記憶を後代の子供たちは訳も  
何も分らぬま父祖から口移しに継承していた  
反射であろう。筆者の先祖圏内には曾祖父を始  
め明治新政府軍の一員となり蝦夷地の榎本軍征  
討戦に従軍し五稜郭で戦った武士たち大勢がい  
て「箱館戦争」は、この筆者とは深い機縁のも  
とにある。

日記・古記録の世界 倉本一宏編 二〇一五  
日文研に就職して、初めての共同研究の成果を  
どう出すかを考えあぐねていた時、思文閣出版  
に出版していただいたのは、本当に助かりまし  
た。

おかげで古記録の研究もやっと始まった（私の  
師匠の弁）と思います。これからこの論集を基  
礎に、本格的な古記録研究が進展してくれば  
いいなと思います。

それにしても、七七七頁にものぼる論集を出し

ていただき、このご恩を次の論集で返さねばと  
考える今日この頃です（余計に赤字を増やすだ  
けかも知れませんが）。（倉本一宏・五七歳・東  
京都・国際日本文化研究センター）

日中演劇交流の諸相 陳凌虹 二〇一四

面白いのです！ いかに文明開化の時、日本に中  
国人が留学していたか。西洋→日本→中国で順  
に近代演劇が成立していった過程がわかりま  
す。「椿姫」が中国で「生花娘」なのも新鮮で  
した。

（植草照月・四〇代・東京都・書評ライター）

日中親族構造の比較研究 官文娜 二〇〇五

ありそうでなかった本です。日本と中国はあま  
りにも親族構造が違うので、比較しようとする  
人いませんでした。貴重な本です。

（植草照月・四〇代・東京都・書評ライター）

日本近世の宗教と社会 菅野洋介 二〇一一

江戸幕府の「諸宗寺院法度」による仏教寺院の  
権力支配を明らかにする一方で、江戸時代ほど  
仏教が民衆の生活に定着した時代はないとの視  
点で、在地社会における民衆の宗教への関わり  
について真摯に対象をとらえ、民衆と宗教に対  
する多元的な視角を提供して、江戸幕府と寺院  
との関係、宗教のもつ意味を問い直している。  
単に修験道史研究にとどまらず、民衆と宗教を  
めぐる多彩で詳細な問題意識からディテールを  
積み上げることによって、日本近世の宗教と社

会を紡ぎ出す方法論は、拙著『熊野信仰の諸相  
—中世から近世における熊野本願所と修験道  
—』（宮帯出版社）においても、本著作のこの  
ような問題意識から大いに示唆を受けている。

（小内潤治・和歌山県・中世史研究会所属）

日本建築の構造と技法 全二巻

岡田英男 二〇〇五\*

建築修理工事報告の入手は、ほぼ不可、岡田先  
生の著作だけでも読むことができたのは一幸  
（当時高価であった）。

（斎藤隆・六四歳・富山県・年金生活）

日本古代宮廷社会の研究 瀧浪貞子 一九九一

古代宮廷社会のドラマを検証する中で、通説へ  
の挑戦や新たな考え方が多く見られ知的興奮を  
味わうことができた。図表が多用されており、  
理解を深めるのに役立った。

（井上昭・六六歳・大阪府・公務員）

初期平安京の構造、藤原房前の通説と異なる政  
治史的位置づけなどはいたいへん興味深く、房  
前・武智麻呂論は最近も読み返した。

（渡里恒信・大阪府・日本書紀研究会）

日本産業技術史事典

日本産業技術史学会編 二〇〇七

本書は出版の噂が先行し、実際に入手する迄あ  
る程度の月日を要した。私の知りあいの方々、  
何人かが執筆されており親しみ易く、且つ有用

本稿の趣旨から外れるが「産業技術史博物館」の実現に関係者の特段の奮起を期待したい。

日本人名辞典「復刻」 芳賀矢一 一九七二※

人名の量が多くていつも便利に使っておりま  
す。古文書の人物を調べるのによい。

(楠阜・六〇代・三重県)

日本禪宗史論集（既刊三冊）

玉村竹二 一九七九ゝ 上のみ在庫あり

著者長年の研究の集大成であり、昭和期の禅宗史研究の金字塔。所収論文のそれぞれが今後とも常に参照されなければならない内容を持つ。

末の年譜も、学問史の資料となる貴重な証言である。  
(堀川貴司・神奈川県・大学教員)

 $\text{CH}_3\text{COO}^-\text{CH}_2\text{CH}_2\text{N}(\text{CH}_3)_3$ 

橋本道範 二〇一五

琵琶湖周辺のむらのありかたを漁労を中心とす

る生業を中心に、環境との関係を論じた文章の  
集成で、中々面白い。

生粹の「文献史学」の徒として出発した橋本さ

も含めて、視野を広め、いやあるところに焦点をしぼるに至る経緯が、読むと明白に浮び上っている。

途中経過を近くで傍観していた身ながら、こうしてまとってみると思考過程はもちろんのこと、到達した業績の独自性が、なかなか判り易いかたちで、読者に伝ってくる。

（川那部浩哉・八三歳・京都府・無職）

日本中世の社会と寺社  
細川涼一 二〇二三

「関東往還記」の注となる論考が収録されています。  
（高根貞緒・六〇代・秋田県・僧職）

儀禮 八木透編 二〇〇一\*

日本の通過儀礼に関する本はとて多く、どれを選んでも同じ内容のものが少なくない中で、

本書は初心者向けの参考書として最適の入門書である。  
(六〇代・奈良県・大学教員)

日本美術史論究 第一卷 序説

源豐宗  
一九七八

日本の美、秋草の美とは何かを教えていただき  
ました。源先生のお人柄の思い出と共に、忘れ  
られない大切なご本です。

(岩間眞知子・東京都)

日本文学の「女性性」

増田裕美子他編 二〇二一

故・菅聡子さんの論考を含め、関西、関東、中部と、大学を超えて日本文学研究者が集い、文学と女性について考えた研究会（於：二松学舎

大学」の成果です。編者のひとりとして、原稿の確認は当時、在外研究中のベルリンでいたしました。ベルリンで郵便を受け取るのにいささか苦労したのも、今ではよい思い出で、ジェンダー系の研究に対して一部の偏見もいまだあるなか、出版を引き受けて下さった思文閣出版さまに感謝しつつ、末永く、ジェンダー研究、文学研究の方に参照していただきたい一冊です。

(佐伯順子)

## 日本法制史論集

牧健二博士米寿記念会編 一九八〇

刊行当時の日本法制史学界の重鎮、気鋭の学者が勢揃い。古代から近代までのさまざまなテーマを興味深く読むことができた。

(井上昭・六六歳・大阪府・公務員)  
仁明朝史の研究 古代学協会編 二〇一

御社から出版させていただいた拙著『律令国家の展開と地域支配』の大筋である仁明朝とりわけ承和期後半に、政治基調や文化的思潮のうえで大きな転換があったのではないかという結論に、大きく賛与していただくような材料をいただいたが、転換の指標としていた課丁数の固定化傾向という見解にたいして、始めて本格的な批判をうけ、「課丁数固定による調庸請負」はなかったとのご批判をいただいた。ご批判には若干の誤読もあるのかと思うが、現在ほかの研究課題にとり組んでおり、反批判の責務を果たしていない。そ

の意味では、今後も二度・三度と読み直して、吟味(自己吟味を含めて)しなければならぬ座右の書である。(西別府元日・六四歳・広島県・広島大学大学院文学研究科教授)

脳死は、死でない。 梅原猛編 一九九二

医療の名を藉る悖徳、狂気の科学技術を信奉する最後の一人の終に撲滅せられ、其跋扈を許す政府の詔に打倒せらるる迄、此種の書物は世に送り出され続けねばならない。反干戈、反原子力の書と同様にである。

(山口公和・五八歳・福岡県)

幕末期の老中と情報 佐藤隆一 二〇一四

幕末維新期は老中といえども自から「対外」「対内」情報が政治をするのに探索活動の時代となっていた。博士論文であろう。「人名索引」および「事項索引」を見れば、凡そ世相を物語っている。幕末期は「対内」と「対外」と二つの情報の時代となっていくのです。

(水谷求・七九歳・京都府・無職)

幕末軍事技術の軌跡 杉本勲他編 一九八七

佐賀藩士、本島藤太夫の『松の落葉』の翻刻・解説である。この史料から得たものは、枚挙に遑がない。第一級の史料である。

(杉谷昭・八八歳・福岡県・佐賀大学名誉教授)  
早池峰岳神楽の継承と伝播

中嶋奈津子 二〇一三

著者は佛教大学通信教育部の出身である。大学

院の出身である。その点で正直、「ガンバッテイル!!」と思いたい。大変な努力である。私も独学で今、日本史の学習をしている。著者の事を知って私もガンバッテイマス。

(今井重義・六〇代・新潟県・農家)  
百人一首万華鏡 白幡洋三郎編 二〇〇五

小倉百人一首を愛好している者ですが、この本の中の口絵のすばらしさに感動しました。また、吉海直人先生の「百人一首の世界」津久井勤・大平修身両先生の「競技かるたの歴史と今後の課題」を特に興味深く読ませていただきました。

(和家寛治・七六歳・愛媛県・無職)  
フェノロサ社会論集 山口静一編 二〇〇〇

出版後一五年、いまだに広告等で紹介されているのはありがたいことだが、売れ行きも芳しくないということか。フェノロサは美術との関連で論じられることが多いが、本来は欧米の思想を移植する目的で招聘された御雇外国人教師であった。その教育論、社会論、宗教論、哲学論、また比較文明論は新生日本を背負う青年たちに甚大な影響を与えた。本書は東京大学における講義資料を巻頭にこれら美術以外の主要な論著をまとめたものである。

特記したいのは、フェノロサの詩「東と西」の全訳を収録し得たことであった。この詩は帰国後のフェノロサが一九九三年のシカゴ万博を機に西欧文明と東洋文化との結合を強く望んで出

版した同名の詩集『東と西』の巻頭を飾る難解な長詩で、畏友大久保直幹東洋大学名誉教授によって初めて邦訳が完成した。(山口静一)

#### 復活！不昧大圓察

逸翁美術館編

二〇二三

展覧会に足を運ぶことができなかったので助かった。やはり松平不昧の書は何処かほのぼのとしていて、見ていて気持ちがいいように思われる。東宝を経営し、宝塚少女歌劇を創始した実業家小林一三が不昧を深く敬愛していたことを、恥ずかしながら、この本を読んで初めて知った。文化は有力者によって支えられている面も確かにあるのだな、と感じた。掲載されている中で個人的に一番好きなのは一行書の「強醒々々」である。(二〇代・福島県・学生)

#### 仏教考古学論攷

六 雑集篇

石田茂作 一九七七

飛鳥奈良期の文化の特性が濃密に集約されている。特に香様、蓮瓣、版畫に関する論攷は、我々他分野の者にとっては通常入手し難い貴重な資料である。さらに染色、玉等の考察は、小生の

専門は化学(薬学)であるが、この観点からも非常に興味深い。熟読しておる貴重な資料である。座右の書となっている。

(黒部俊夫・七〇代・埼玉県・薬剤師、技術士) 仏教美術を学ぶ 中野三他 二〇一四

対話形式なので理解しやすいと思いました。マニアックなお話が多いと思います。

(佐谷道子・八一歳・福岡県・書家) 平安時代陰陽道史研究 山下克明 二〇一五

平安時代の陰陽師をあげよと問われたならば、即座に安倍晴明をあげよう。これ程に安倍晴明の存在は大きい。しかも我々が懐く安倍晴明像は、伝承の域にあり、安倍晴明を式神を駆使する等の呪術師として捉える傾向がある。本書は、安倍晴明を平安時代と云う歴史の上において捉えて、その実像の一端を我々に明したのと言えよう。

#### 平安時代の古記録と貴族文化

山中裕 一九八八

ちようど二〇年前の夏、山中裕先生の御堂関白

記講読(於思文閣会館)に参加し、その参考に

本書を読んだことを憶えている。その後、この分野を専攻することにはならなかったが、山中先生が昨年逝去されたことと最近聞き、感慨深い。

(渡里恒信・大阪府・日本書紀研究会)

#### 平安人物志短冊集影

28頁

#### 房総風雅史

小倉光夫

二〇〇三\*

千葉県の古代から近現代に至る、風雅の歴史がまとめられた、稀代の名著である。

(鈴木恒雄・七二歳・千葉県・農業)

#### 法然伝と浄土宗史の研究

中井真孝 一九九四

古代仏教制度史を研究されていた著者が、もう一方でライフワークとして取り組んできた浄土宗の宗祖法然上人の諸伝記に関する研究をはじめ、中世から近世にいたる京都を中心とする浄土宗寺院の実態を、史料に基づき研究した諸論文で構成されており、のちに出版された『法然上人絵伝の研究』の先行研究としても、非常に重要な論文集である。



(きつちー・五〇代・京都府・大学職員)

蓬萊山と扶桑樹

岡本健一 二〇〇八

前方後圓墳は蓬萊山を起源とするの説の正しさがいかばかりであらうとも、此書を読んで損はない、まづ損した気分を味はふ者はあるまい。古代史に就ては勿論のこと、浦嶋譚、浦島傳説に關心ありのすべての方にも讀を奨めたい。

(山口公和・五八歳・福岡県)

没後二〇〇年 蕪村

逸翁美術館他編 二〇〇三

松尾芭蕉さんは「偉大」だが、與謝蕪村さんには誰にも判りやすい広さと遊びがある。安東次男さんの評伝・鑑賞も余すところがない。展覧会の図録だが、逸翁美術館・柿衛文庫両美術館の収蔵品を中心に各様の見事な図版が並ぶ。五年後にM I H O M U S E U Mで開かれた「与謝蕪村―翔けめぐる創意」の図録とともに、まことに秀逸であつて、講談社版『蕪村全集』の「絵画遺墨編」の隔靴搔痒感を治してくれる。これで俳諧を中心とする詩作品を読むときの楽しみが、いっそう大きく拡まった気がして、まことに嬉しい次第だ。

(川那部浩哉・八三歳・京都府・無職)

箕作阮甫

〔復刻〕 吳秀三 一九七一\*

阿波洋学史に興味をもち始めた研究初期の頃、偶々入手出来た『箕作阮甫』の中で、思いがけなく二人の阿波の先人に会えて夢中になった当時のことが、大変なつかしく思い起こされる。

(佐光昭二・八七歳・徳島県・無職)

御堂関白記全註釈

全一六冊

山中裕編

二〇〇三―二

大和(奈良県)は藤原道長が古野金峯山へ参詣した折の日記が私のその道筋案内に役立っています。私は歴史探訪の講師をつとめていますので。(長田光男・八九歳・奈良県・大和郡山市文化財審議会会長)

みやこの近代

伊從勉他編 二〇〇八

名古屋に関してもこの様な本が出来るとよいです。現れないのは対象とするもの・こと・ひとが少いのか、あつても興行や拡がり狭いのか、又は企画するプロデューサーが出てこないのか。(九〇歳近い老翁)

宮崎圓遵著作集

全七巻

一九八六―九〇

第一巻―三巻は品切

宮崎圓遵(みやざき・えんじゅん)は、昭和時代の仏教史学者である。龍谷大学で長く仏教史、真宗史を講じた。筆者も昭和五十年代、龍谷大学の学生・大学院生の頃、学んだことがある。彼のゼミに入ったことはないが、国史学の特殊講義などを受講した。圓遵の業績をまとめていただいて、思文閣出版には感謝、感謝である。

圓遵の学風は、手堅い実証主義である。決して派手な理論家でも思想家でもなかったが、彼の学問は陳腐化しない。仏教史学会で、読んでお

くべき先行研究として、定評があるのだ。だから古書業界で、今も、彼の本が高値で取引されている。(安食文雄・五八歳・茨城県・ジャーナリスト、史学者)

村田正志著作集

全七巻 一九八三―八五

学生時代に南北朝時代を研究していたため、村田正志氏の『南北朝史論』(中央公論社版)は、その当時私の宝物でした。しかし、この著作集が出版され、その第1巻から第3巻までが南北朝研究の基本書で構成されており、その宝物を凌駕してしまいました。また同時代の『椿葉記』の注釈や著者自ら収集された古文書等の史料が翻刻収録されている、非常に貴重であり、当該研究を志す若い世代には、ぜひ読んでいただきたい著作集です。

(きつちー・五〇代・京都府・大学職員)

名家伝記資料集成

全五巻

森繁夫編 一九九一

畢生の名著。この原本が古書肆の軒先に埋れていた事、又、それを発見した中野莊次氏の炯眼。森繁夫氏は、岡山の人だが、岡山県では全く顕彰されていない。森氏の事は随分と調べたが、不詳の部分が多い。残念である。この資料が家族から出された事、よく聞く事だが哀れである。

(高市俊次・六七歳・愛媛県・神職)

名家伝記資料集成

平安人物志短冊集影 小笹喜三編著 一九七三

古い寫眞の解説に、「右から○氏、△氏、一人おいて□氏」とある。當時の錚々たるメムバアの一人なのだから唯の人ではないのに、今は忘れ去られてゐる。悲しいことだ。徳川中後期の歌人や國學者を追つてゐると、斯様に忘れ去られてしまつた人物が多いのが氣になる。そのやうな時に『名家伝記資料集成』の御世話になつてきた。暫く絶版であつたのを平成三年に再版されたのを機に、「清水の舞台から」と思ひきつて購入、以來座右の書として恩恵を蒙つてゐる。無名の人物の短冊は安い。一括して求めたものを『平安人物志短冊集影』と照らし合はせ、一つでもあつた時の喜びは格別だ。この二著を行き來して埋もれた人物に光をあててきた。この期の文雅の活動は著名人ばかりが目立つが、實は多くの人が支へてゐたのであつて、それ忘れはなるまい。

(中澤伸弘・五〇歳代・東京都・高校教師)



明治博物館事始め

オンデマンド復刊、期待！ よい平成時代到来ですね。

明治文化と西洋人 重久篤太郎 一九八七\*

自分が本書の編集に参加したことでもあり、まことに思い出深い本である。重久先生は私の英学史の師であり、時折本書を取出して貴重な情報を得ている。

（北垣宗治・八五歳・京都府・大学名誉教授）  
もう一つの中世像

バーバラ・ルーシュ 一九九一\*

まずは、口絵の無外如大禪尼像に衝撃を受けた。こんな人間的な深さを表す女性のイメージがあつたのかと。本書は、日本の中世において、女性や民衆が担つた文芸、信仰、美術に目を向けて高く評価した画期的な書物である。研究の前提として、著者の文化に対する、人間に対する「愛」を感じることができる。

(野村育世・東京都・歴史研究者)

椎名仙卓 一九八九

森田りえ子作品集

京都画壇の伝統と革新、森田画伯の真髓にふれることの出来る本です。美しい装丁に惚れ惚れします。我が家では本棚のいちばん目立つところに飾つては、時折眺めて楽しんでおります。

（榎本博一・三三歳・奈良県・会社員）

八重さん、お乗りになりますか 本井康博 二〇一二

八重さん、お乗りになりますかという言葉に、新島襄のやさしさがよくあらわれている。新島襄は、友人に宛てた手紙に、「彼女は見た目は決して美しくありません。ただ、生き方がハンサムなのです。私にはそれで十分です。」と綴っている。

晩年の八重の言葉もいい。「襄のライフは、わたしのライフ」。この言葉から、助け合つて生きた二人の人生が、たちあがつてくる。

(井上明彦・京都府)

焼畑の環境学 原田信男他編 二〇一一\*  
執筆者の一人として加わった。編集担当の那須

さんには、拙稿をたいへん丁寧にチェックしていただいた。また本書のご縁で、監修者・編者・執筆者の方々は、その後もいろいろな仕事をご一緒している。私にとって、大切な一冊である。(山田仁史・四二歳・宮城県・東北大学大学院文学研究科准教授)

陽明叢書 記録文書篇 御堂関白記 全五巻

陽明文庫編 一九八三〜八四\*

それまで史料と言えば活字本だけに頼っていた私が、はじめて本格的に写真版を活用し、原本の重要性に目覚めるきっかけとなった本です。

陽明文庫で原本を閲覧するのが如何に困難から知っていたので、この写真版はきわめてありがたかったです。おかげ様で『御堂関白記』の研究も進み、今では陽明文庫でも閲覧できるようになりました。(倉本一宏・五七歳・東京都・国際日本文化研究センター)

与謝野晶子と小林一三

逸翁美術館編 二〇一一

小林一三は上田秋成筆、「源氏物語」五十四貼に因んで短歌五十四首を詠んだ短冊を貼った屏風を所蔵、『新訳源氏物語』の与謝野晶子が見せてもらいに行っている。

「源氏物語」を二度まで訳した谷崎潤一郎は一三宅に近い阪神間を転々としながら、一度もまみえてたことがない。奇異だが、これは偏に

谷崎の性格によると考えられる。谷崎の実母思

慕がテーマにした『吉野葛』の主人公は母の出自が明らかでなく、養家が紙商の秋成に擬えられていると考証中で、意外にも国文学者秋成にこれといった源氏物語論が伝わっていただけに、屏風についての本書は貴重な資料であった。なお、母の出自は長島弘明によって、御所市の旧家であることが解明されている。

(吉條久友・七七歳・奈良県・開業医)

蘭学の背景 石田純郎編著 一九八八

シーボルトの研究に活用。

(神村勝一・七九歳・大阪府)

歴史の地層から 河野健二 一九九〇

京都大学教授、京都市立芸術大学学長等を歴任され、フランス革命の研究等で知られる故河野健二先生のエッセイ集である。

執筆の対象は、古今東西の事象に及び、研究者の視点から、いずれも鋭い分析、批判がなされている。

私にとっては、読むたびに、故人と親しくさせていたいただいた過ぎし日のことを思い出させてくれる一冊である。

(北田貞雄・京都府)

歴史のなかの天皇陵 高木博志他編 二〇一〇  
天皇陵の選定経過やその課題等がまとめて記載されており、座右の書のひとつになっています。巻末の天皇陵の分布図も役立ちます。

(森修己・六二歳・兵庫県・公務員)

増補 蓮月尼全集 村上素道編 一九八〇

土と和歌と書をもって孤高の生涯を送った大田垣蓮月を知るには貴重な書である。叔父は自作の和歌を刻み込んだ蓮月尼の陶器を愛したが、愛知・三河刈谷の人、村上忠順との二十余年に渉る交際の二六通余の書簡は蓮月尼と村上忠順を研究するのに貴重な資料であり、現住地の豊田市(旧挙母藩主内藤家)にとっても忠順との関係で縁のある人である。消息編の書簡を愛読する。(宮澤和夫・八〇歳・愛知県・名古屋郷土文化会会員)

老僧が語る京の仏教うらおもて

五十嵐隆明 二〇一三

華やかなイメージで語られがちな京都ですが、その表象形成を担ってきたのは他ならぬ寺社仏閣であったでしょう。京に「齋く面々」について、ありのままに語ったユニークな書だと思います。

(三〇代・大阪府・会社員)

鹿苑寺と西園寺 鹿苑寺編 二〇〇四\*

本書で「金閣寺誌」「鹿苑」があることが初めてわかりました。

(斎藤隆・六四歳・富山県・年金生活)

増補 蓮月尼全集 村上素道編 一九八〇

土と和歌と書をもって孤高の生涯を送った大田垣蓮月を知るには貴重な書である。叔父は自作の和歌を刻み込んだ蓮月尼の陶器を愛したが、愛知・三河刈谷の人、村上忠順との二十余年に渉る交際の二六通余の書簡は蓮月尼と村上忠順を研究するのに貴重な資料であり、現住地の豊田市(旧挙母藩主内藤家)にとっても忠順との関係で縁のある人である。消息編の書簡を愛読する。(宮澤和夫・八〇歳・愛知県・名古屋郷土文化会会員)

老僧が語る京の仏教うらおもて

五十嵐隆明 二〇一三

華やかなイメージで語られがちな京都ですが、その表象形成を担ってきたのは他ならぬ寺社仏閣であったでしょう。京に「齋く面々」について、ありのままに語ったユニークな書だと思います。

(三〇代・大阪府・会社員)

| 書評・紹介一覧 9～11月掲載分                           |                                         | ※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕 |
|--------------------------------------------|-----------------------------------------|----------------------------|
| 大坂蔵屋敷の建築史的研究<br>(紹)『大阪春秋』160号              | 世界喫煙伝播史<br>(紹)『京都新聞』9/27                |                            |
| 緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く<br>(紹)『大阪春秋』160号         | (紹)『信濃毎日新聞』9/27                         |                            |
| 怨霊・怪異・伊勢神宮<br>(評)『史学雑誌』124編9号(片岡耕平)        | セザンヌと鉄斎<br>(紹)『月刊美術』No.481              |                            |
| 京都 近代の記憶<br>(紹)『読売新聞』夕刊11/16               | 万国博覧会と人間の歴史<br>(紹)『朝日新聞』11/15           |                            |
| 近世の王権と仏教<br>(紹)『中外日報』9/25                  | 茶と室内デザイン<br>(紹)『茶華道ニュース』9/1             |                            |
| 近世の禁裏と都市空間<br>(評)『日本歴史』808号(長坂良宏)          | (紹)『茶道雑誌』11月号                           |                            |
| 近代日本〈陳列所〉研究<br>(評)『建築史学』65号(米山勇)           | (紹)『サライ』12月号                            |                            |
| 近代日本の都市社会政策とマイノリティ<br>(評)『日本史研究』637号(高野昭雄) | 茶の湯 恩籙抄<br>(評)『茶の湯文化学』24号(依田徹)          |                            |
| 近代日本の歴史都市<br>(紹)『建築史学』65号(小南弘季)            | 茶湯百亭百会<br>(紹)『茶華道ニュース』9/1               |                            |
| 西鶴の文芸と茶の湯<br>(評)『茶の湯文化学』24号(廣瀬千紗子)         | 中世の契約社会と文書<br>(評)『歴史学研究』936号(湯浅治久)      |                            |
| 在京大名細川京兆家の政治史的研究<br>(評)『歴史学研究』938号(山田康弘)   | 幕末・維新の西洋兵学と近代軍制<br>(評)『軍事史学』51巻2号(幡新大実) |                            |
| 識字と学びの社会史<br>(評)『日本歴史』810号(辻本雅史)           | (紹)『同志社時報』140号                          |                            |
| (評)『教育学研究』82巻3号(山梨あや)                      | ミシンと衣服の経済史<br>(評)『経営史学』50巻2号(廣田義人)      |                            |
| 神話・伝承学への招待<br>(紹)『中外日報』10/23               | (評)『日本歴史』808号(井上雅人)                     |                            |
|                                            | 室町幕府の東国政策<br>(評)『日本歴史』809号(江田郁夫)        |                            |
|                                            | 琳派 響きあう美<br>(紹)『月刊 京都』No.771            |                            |

## 9月から11月にかけて刊行した図書

| 図 書 名                 | 著 者 名             | ISBN978-4-7842 | 本体価格   | 発行月 |
|-----------------------|-------------------|----------------|--------|-----|
| 神話・伝承学への招待            | 斎藤英喜編             | 1813-4 C1020   | 2,300  | 9   |
| 京都 近代の記憶              | 中川理著              | 1812-7 C1052   | 2,200  | 9   |
| 雪叟紹立 雪叟詩集訓注           | 芳澤勝弘編著            | 1801-1 C3015   | 15,000 | 9   |
| 水系都市京都                | 小野芳朗編著            | 1815-8 C3021   | 5,400  | 10  |
| 万国博覧会と人間の歴史           | 佐野真由子編            | 1819-6 C3020   | 9,200  | 10  |
| 正倉院の香薬                | 米田談典著             | 1821-9 C3020   | 10,000 | 10  |
| 基礎茶式                  | 呉遠之著              | 1824-0 C1076   | 900    | 10  |
| 響きあう東西文化              | 宗像衣子              | 1814-1 C3070   | 5,400  | 10  |
| 備前岡山の在村医 中島家の歴史       | 中島医家資料館・中島文書研究会編著 | 1826-4 C3021   | 10,000 | 11  |
| 神仏習合の歴史と儀礼空間〔オンデマンド版〕 | 嵯峨井建著             | 7000-2 C3021   | 8,600  | 11  |
| 近世吉野林業史〔オンデマンド版〕      | 谷彌兵衛著             | 7001-9 C3021   | 11,100 | 11  |
| 明治博物館事始め〔オンデマンド版〕     | 椎名仙卓著             | 7002-6 C1020   | 4,800  | 11  |

## 9月から11月にかけて刊行した継続図書

| シ リーズ 名      | 配本回数 | 巻数 | 巻タイトル   | ISBN978-4-7842 | 本体価格   | 発行月 |
|--------------|------|----|---------|----------------|--------|-----|
| 佛教大学国際学術研究叢書 | 5    | 5  | 仏教と社会   | 1820-2 C1015   | 1,900  | 9   |
| 京都大学史料叢書     | 13   | 6  | 西山地藏院文書 | 1816-5 C3321   | 13,000 | 10  |
| 和食文化ブックレット   | 1    | 1  | 和食とは何か  | 1825-7 C1077   | 900    | 11  |

(表示価格は税別)

▼本はアマゾンで買う、という方は多いと思います。12/8現在、刊行したばかりの「和食とは何か」はアマゾンで「一時的に在庫切れ」ですが、定価972円のところ4者が「中古品」として2千円台で売っています。密林に蠢く毒虫には充分ご注意ください。(h)

☆フェア情報

早稲田大学生協BC

「人文系出版社9社合同フェア」

京都大学生協

「2016年人文・歴史書大感謝祭」

左記書店にて歴史書懇話会ミニフェアを開催中です。  
3月31日まで

- ・TENDO八文字屋 (山形県天童市)
- ・紀伊國屋書店新潟店 (新潟県新潟市)
- ・今井書店グループセンター店 (島根県松江市)
- ・芳林堂書店高田馬場店 (東京都新宿区)
- ・ジュンク堂書店三宮駅前店 (兵庫県神戸市)
- ・喜久屋書店阿倍野店 (大阪市阿倍野区)
- ・ジュンク堂書店上本町店 (大阪市天王寺区)
- ・今井書店出雲店 (島根県出雲市)
- ・ジュンク堂書店ロフト名古屋店 (名古屋市中区)

▼TTP交渉の大筋合意はじつはわれわれ編集の現場にも影響します。著作権の扱いが変わって保護期間が延長、非親告罪化するそう。世の中の動きに無関心ではいられないなと思います。

▼今号から新連載の「温故知新」コーナーでは、平素からお世話になる便利堂の西村様に、大変丁寧な取材のご対応いただきました。この場を借りて、御礼を申し上げます。(大)

▼本誌も百号を迎え、第一号の編集に携わった者として感慨ひとしおです。といっても私の在職総年数は一〇年ほどしかないのですが……(Q)

▼沢山のご寄稿をいただいた「思い出の一冊」。中には私が生まれる前の書籍も……昔の方が良かったなどとならぬよう、精進して参ります。(m)

▼武雄市図書館問題、小社としても選書内容が気になります。要は必要とされるのか否か。私的には蘭学資料の状態が気になります。(江)

▼上司にとって大きな区切りの号なのでしょう、勤続十年でいきなり登場することになりました。祭の後の次号には居ないかも？笑(き)

▼今年から、日頃の運動不足と、健康のため筋トレを始めました。少しさぼると、筋力の低下を実感。日々の積み重ねが大事ですね。(I)

▼表紙図版・鴨東通信バックナンバー

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(4・7・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうつうしん  
鴨東通信 四季報 No.100

2015(平成27)年12月24日発行

発行 株式 会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

# 和食文化 ブックレット

— ユネスコ無形文化遺産に登録された和食 —

和食文化国民会議 監修 【第一期・全10巻】

各巻 A5判・九六頁／本体 九〇〇円

※二〇一三年「和食 日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録された。その保護継承をになう公的団体である和食文化国民会議（略称…和食会議、会長…熊倉功夫）が総力をあげたブックレットシリーズ。

※和食とは何か。とてもわかりにくい時代になってきている。本シリーズは、和食の典型的なスタイル、和食文化というべき食べ方、食器、しつらい、マナー。さらに和食の食材、調理法、盛りつけなど、一番基本となるテキストである。

※郷土料理を含めた広義の和食文化を視野に食育、地産地消、年中行事なども絡めながら、和食文化の保護・継承、そしてその価値の再発見に取組む。

風土と歴史、自然を尊ぶ  
日本人の気質を継承する  
新シリーズ!!

【第一期・全10巻 構成】

第1巻 和食とは何か

熊倉功夫（和食会議会長・静岡文化芸術大学学長）

江原絢子（東京家政学院大学名誉教授）

著

【11月24日刊行】



【以降3ヶ月に一冊刊行】

書名・内容・刊行順については変更することがあります

第2巻 和食・年中行事としきたり

中村羊一郎（民俗学者）著

第3巻 和食のおもてなしとマナー

後藤加寿子（料理研究家・熊倉功夫著

第4巻 和食と健康

第5巻 和食の材料と調理

第6巻 和食の歴史

第7巻 うまみの秘密―和食のだしと調味料

第8巻 ふるさとの食べもの

第9巻 日本酒・緑茶・和菓子

第10巻 海外に広がる和食

# 万国博覧会と人間の歴史

佐野真由子 編

【10月刊行】

▼A5判・七五八頁／本体九、二〇〇円

一八五一年のロンドン万博以来、連続と続いてきた万国博覧会は、近代以降の人間社会のあゆみを語る上で、決して無視できない対象である。本書は多様な領域の研究者のほか、万博をつくり、支える立場の政府関係者や業界関係者が集い、さらにアジア各国の研究者を迎えてさまざまな関心からともに議論を重ねてきた共同研究の成果。

## I 博覧会の人

| 内 容                              |        |
|----------------------------------|--------|
| 万博の人、ラザフォード・オールコック               | 佐野真由子  |
| —— 一八五一、一八六二、一八七八、一八八六 ——        |        |
| 岩倉使節団の見たウィーンとウィーン万博              | 芳賀 徹   |
| 一八七八年パリ万国博覧会における前田正名の役割          | 寺本敬子   |
| —— ジャポニスム流行の立役者 ——               |        |
| 「隠者の国」朝鮮士大夫のアメリカ文明見聞録            | ユク・ヨンス |
| —— 出品事務大員鄭敬源と ——                 |        |
| 一八九三年シカゴ・コロンビア万国博覧会 ——           |        |
| 並河靖之と万国博覧会                       | 武藤夕佳里  |
| —— 並河七宝と巴里庭をめぐる人びと ——            |        |
| 建築家劉既漂と中国における「新建築」の誕生            | 青木信夫   |
| —— パリ万博から西湖博覧会へ ——               |        |
| 万国博覧会と藤田嗣治                       | 林 洋子   |
| —— 一九〇〇年パリ、一九三七年パリ、そして一九四〇年東京 —— |        |

## II 博覧会の場所

景福宮から朝鮮博覧会場への空間変貌  
幻の博覧都市計画 —— 東京月島・日本万国博覧会 ——  
中空構造で解く千里ニュータウンと大阪万博  
南紀熊野体験博と熊野の表象

ウィーベ・カウテルト

## III 博覧会と仕事・社会

資料から見るランカイ屋と装飾業の歴史  
コンパニオンが女看守と呼ばれたころ

—— 博覧会場における女性接遇員の成立と展開 ——  
博覧と衆智 —— 渡辺洪基と萬年会の目指したもの ——  
万国博覧会を飾った日本の革と紙

—— ジャポニスムを越えて ——

都市の電化と博覧会

愛知万博前夜 —— 博覧会の企画制作現場から ——  
上海万博・麗水万博日本館から見た日本の博覧会行政

## IV 博覧会の形成と展開

近代パリ万博の軌跡 一八五五―一九〇〇

—— その「万有理念」が顕すもの ——

万国博覧会とオスマン帝国

—— 「美術」とオスマン宮廷の日本趣味受容 ——

オリエンタリズムとナショナリズム

—— 中国の万国博覧会参加をめぐる権力の変容 ——

南洋勸業会をめぐる日中関係 —— 上海万博との対比から ——

戦後日本が夢見た世界

—— 万国博美術展、原始美術、太陽の塔 ——

都市化をテーマとした上海万博

—— 万博をめぐる中国の過去と未来 ——

中国における博覧会ブームの誕生

増山一成  
中牧弘允  
神田孝治

石川敦子  
井上章一

瀧井一博  
鵜飼敦子

橋爪紳也  
澤田裕二  
岩田 泰

市川文彦

ジラルデッリ青木美由紀

徐 蘇斌

武藤秀太郎

川口幸也

江原規由

曹 建南

# 戊辰内乱期の社会

佐幕と勤王のあいだ

【1月刊行予定】

宮間純一著

鳥羽・伏見の戦いで幕を開けた戊辰内乱は、否応なく当時の社会全体を巻き込み、あらゆる身分の人びとに日和見を許さなかった。内乱の当事者たちはそれぞれの正当性を喧伝し、彼らの支配を受けることになる人びとは、時代が佐幕から勤王へと移りかわるなかで立場を表明することを迫られた。

みずからの拠るべき正当性を探し求める者、保身のために立場を翻す者、混乱に乗じて地位の上昇を図る者――、新出史料を活用しながらさまざまな思想が交錯する内乱期の社会像を描き出す。

## ■第1部 「官軍」の正当性

第1章 「官軍」と主権の表象

第2章 公家の位置―鷲尾隆聚を中心に―

補論 榎本軍首脳部処分問題にみる「朝敵」寛典の論理

## ■第2部 旧幕府抗戦論の限界

第3章 旧幕府抗戦論の正当性

第4章 堀田正倫の上京―藩士の日記を素材に―

第5章 「朝敵」藩の恭順理論―伊予松山藩を事例に―

## ■第3部 社会集団の欲求と草莽隊

第6章 神職集団の武装化

第7章 草莽隊の上昇志向―下野利鎌隊を事例に―

第8章 地方大社の勤王運動―香取神宮尚古隊―

## ■第4部 地域の葛藤

第9章 関東農村の佐幕的状况―上総国を中心に―

第10章 旧旗本阿部詮吉郎の朝廷化と知行所

▼A5判・三三〇頁／本体七、五〇〇円

みやま・じゅんいち…一九八二年生。宮内庁書陵部研究員。

# 徳川社会と日本の近代化

箕谷和比古編

欧米列強に互しうるだけの力を蓄えていた徳川日本の文明史的力量に着目。徳川社会はどのような力powerを、いかにして形成しえたのか、多分野の研究者の書き下ろし論文25本により総合的に究明する。

▼A5判・七三〇頁／本体九、八〇〇円

# 幕末・維新の西洋兵学と近代軍制

竹本知行著

大村益次郎とその後継者

軍隊の創設の軌跡を、大村益次郎とその遺志をついだ山田顕義らの動向にたどり、その政治上の特性を探る。

▼A5判・三四〇頁／本体六、三〇〇円

# 明治維新期の政治文化

佐々木克編

政治史、文化史、思想史、精神史を融合した「政治文化」という視点から、明治維新期の諸問題にアプローチを試みる。

▼A5判・三九〇頁／本体五、四〇〇円

# 岩倉具視関係資料〔全2巻〕

佐々木克・藤井讓治・三澤純・谷川稯編

憲政資料室所蔵文書・対岳文庫所蔵文書・内閣文庫所蔵文書に次ぐ、第4の岩倉具視関係文書群（現在は海の見える杜美術館〈広島県廿日市市〉所蔵）。原本校正を綿密に行い完全活字化した。

▼A5判・総一一〇八頁／本体二四、〇〇〇円

# 近代日本のユダヤ論議

宮澤正典著

【12月刊行】

大正期から一九九〇年代までの、日本における「ユダヤ論議」をたどる。特に、昭和戦前期を中心に、日本と上海におけるユダヤ避難民対策についてその実態を論証。

▼A5判・三七〇頁／本体五、〇〇〇円

# 今村家文書史料集

今村家文書研究会編

(全2巻)

戦国期以来、京都近郊の伏見街道沿いで地域の有力者として代々続いてきた、今村家に伝えられた文書群の翻刻史料集。

総点数は約六七百点、享祿四年から約四百年間にわたる史料のうち①戦国期・近世前期の史料、②今村家の由緒や経営に関する史料、③幕末の加茂川筋に関連する史料、④六条村や銭座跡村の「穢多」および「非人」関係史料、⑤幕末・明治初年の公用日誌を中心とした近代文書を翻刻し、解題を付す。

文書全点の目録および絵図類の高精細画像とトレース図三〇点を収録したCDを両巻(上下巻とも同内容CD)に収める。

総説今村家文書について 今村家文書の調査経緯／今村家文書の概要

## 予定内容

### 上巻 中世～近世編

### 下巻 近代編

第一章 戦国・近世前期の今村家 解題／年月日の明記された文書・帳簿類／年未詳の文書・帳簿類  
第二章 今村家の由緒と経営 解題／今村家の由緒と泉涌寺・妙法院／今村家の経営／今村家住宅の建築構成と変遷過程／今村家の聞き取り調査  
第三章 幕末の加茂川筋改造と柳原庄 解題／安政三年の加茂川筋御汲御普請／東台用水の普請と水車の設置／足を引く張る加茂川筋普請入用  
第四章 賤民集落と非人小屋 解題／銭座跡村／銭座跡村出村／大西組(小稲荷)／七条裏等非人関係

解題 近代の柳原庄と今村家 添年寄・中年寄としての今村忠右衛門／柳原庄の庄屋今村家 近代柳原庄の形成と柳原町  
第一章 本町通と柳原庄の近代  
第二章 今村家の人事  
第三章 明治維新期の日記類

上巻 中世～近世編

下巻 近代編

〔1月刊行予定〕

▼B5判・二七八頁／本体八、八〇〇円  
▼B5判・三五四頁／本体九、二〇〇円

## 京都冷泉町文書 (全6巻・別巻1)

京都冷泉町文書研究会編

16世紀後半から明治期まで切れ目なく残存している個別町の稀有な史料集。その全内容を編年収録。近世における都市史・社会構造史研究の基本史料。

▼A5判・平均四五〇頁／揃本体九三、〇〇〇円

## 近世京都近郊の村と百姓

佛教大学研究叢書22

尾脇秀和著  
相給村落であった山城国乙訓郡石見上里村と、同村百姓にして公家家来でもあった大島家を対象に、近世百姓の変容と実態を多面的に明らかにする。

▼A5判・二九四頁／本体四、八〇〇円

## 近代日本の都市社会政策とマイノリティ

歴史都市の社会史

杉本弘幸著  
近代日本の社会政策・社会福祉の受益者である社会的マイノリティがいかに政策形成に関与しようとし、政策に包摂されていったかを明かす実証研究。

▼A5判・四一二頁／本体七、二〇〇円

## 水系都市京都 水インフラと都市拡張

小野芳朗編著

山紫水明とたたえられるのは裏腹に、灌漑・防火用の表流水の欠乏に悩まされつづけた京都。近代京都の都市史を水インフラという視点から論じる。

▼A5判・三一〇頁／本体五、四〇〇円

## 近代日本と地域振興 京都府の近代

高久嶺之介著

京都府下の明治初期から戦後にいたる、道路・運河開鑿や観光資源、開拓村等をテーマに、近代日本の地域社会を地域振興の視点から描く。

▼A5判・三六四頁／本体六、五〇〇円

# 備前岡山の在村医

## なかしま 中島家の歴史

中島医家資料館・中島文書研究会編著

【11月刊行】

江戸中期より続く在村医家に残る貴重な書籍・古文書・器物類の解説・分析を通して、当家歴代の生涯、研究論文9篇、史料翻刻5篇、蔵書目録および年表を収録。中島家の医業の歩みに光を当てる一書。

### I 中島家の歴史 中島洋一（医門第九世）

中島姓の由来／中島多四郎友行／中島友三（医門第一世）／中島玄吉（医門第二世）／中島宗仙（医門第三世）／中島友玄（医門第四世）／中島玄章（医門第五世）／中島哲（医門第六世）／中島一太（医門第七世）／中島達二（医門第八世）／中島家系図

### II 研究論文・史料

地域医療史研究の端緒としての中島家文書（松村紀明）／中島友玄の患者の診療圏について（木下浩）／中島友玄と岡山県邑久郡における江戸末期から明治初期の種痘（木下浩）／事業者としての友玄（梶谷真司）／中島宗仙・友玄と一九世紀日本の漢蘭折衷医学（町泉寿郎）／『胎産新書』諸本について（清水信子）／『回生鉤胞代廳』からみた中島友玄の産科医療（鈴木則子） 地域社会における宗教者たち（平崎真右）／中島哲と明治期岡山の美笑流（黒澤孝）

※

※

※

回生鉤胞（代）臆（板野俊文・田中健二・中島洋一）／中島友玄の京学日記（町泉寿郎）／中島宗仙書簡集（町泉寿郎）／京遊厨費録（町泉寿郎）／筑紫行雜記（松村紀明）

### III 中島家蔵書目録 清水信子編

### IV 中島家年表 清水信子編

▼B5判・三一八頁／本体一〇、〇〇〇円

# 廣瀬淡窓

井上敏幸監修

【1月刊行予定】

高橋昌彦編著／佐藤晃洋・大野雅之・佐藤香代著

江戸時代後期、豊後日田に生まれ活躍した儒学者・教育者・漢詩人、廣瀬淡窓（一七八二―一八五六）の評伝。従来の評伝が、淡窓の著作に傾注して叙述されてきたのに対して、本書では、淡窓の日記や自叙伝、著書をはじめ、書簡や漢詩、周辺史料などから淡窓の生涯を再検討し、新たな淡窓像を構築する。とくに漢詩を多くとりあげ、その背景についても解説。著述と出版についても、最新の調査をふまえて詳細に検討する。

## 【内容】

### 序章 淡窓が生んだ故郷日田

淡窓が生まれ育った地理的・文化的環境／淡窓を生んだ廣瀬家

### 第一章 教育者としての歩み

生い立ち／遊学／大病と妹秋子／教育の道を進む決意／咸宜園における教育システム／試作を重ねた教育／廣瀬家による咸宜園支援／咸宜園の継承問題／塾外での教授活動／晩年の淡窓

### 第二章 淡窓の漢詩を読む

初編／二編

### 第三章 淡窓の著述と出版

著作について／出版までの道のり『遠思樓詩鈔』初編を中心に／『詩鈔』の諸本について／校訂作業の様子／その他の出版について  
終章 咸宜園教育の広がり

▼B6判・三三四頁／本体二、五〇〇円

たかはし・まさひこ……一九六〇年山形県生。九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退、修士（文学）。日本近世文学専攻。現在、福岡大学人文学部教授。

# 織豊期主要人物居所集成 〔第2版〕

藤井讓治編

織豊期を生きた政治的主要人物の移りゆく居所を通して追った研究者必携の書。

第2版の刊行にあたり、初版の誤植訂正はもちろん、一部の日付を確定・訂正した。

特に豊臣秀吉については従来の関係文書編年に誤りがあつたため、大幅に訂正した。

第2版での訂正箇所は、小社HPに掲載いたします。

各章は、「略歴」「居所と行動」で構成され、現在知りうる限りの居所情報を編年で掲載。

・辞書的な利用はもちろん、通覧すれば秀吉の天下統一の道程や戦国武将の動静、同時代人たちの交流を詳細に追える。

## 《収録人物一覧》

|      |       |      |          |
|------|-------|------|----------|
| 織田信長 | 豊臣秀吉  | 徳川家康 | 足利義昭     |
| 柴田勝家 | 丹羽長秀  | 明智光秀 | 細川藤孝     |
| 毛利輝元 | 小早川隆景 | 上杉景勝 | 伊達政宗     |
| 浅野長政 | 福島正則  | 片桐且元 | 近衛前久     |
| 西笑承兌 | 大政所   | 浅井茶々 | 孝蔵主      |
|      |       |      | 北政所(高台院) |

## 《執筆》(五十音順)

相田文三(虎屋文庫研究主任)／穴井綾香(久留米市市民文化部文化財保護課主任主事)／尾下成敏(京都橋大学准教授)／仙田善雄(大手前大学教授)／中野等(九州大学教授)／早島大祐(京都女子大学准教授)／福田千鶴(九州大学教授)／藤井讓治(京都大学名誉教授)／藤田恒春(堀新共立女子大学教授)／松澤克行(東京大学史料編纂所准教授)

〔1月刊行予定〕

▼B5判・四七六頁／本体六、八〇〇円

# 正倉院の香薬

材質調査から保存へ

米田該典著

〔11月刊行〕

本書は、平成六年(一九九四)から開始した第二次正倉院薬物調査に参加し、宝庫に伝存する香薬の材質調査の成果を中心に、長年考究して来た香薬についても加味して、著者により全巻書き下ろしたもので、先駆的な研究成果の集大成である。

理系・文系を問わず、有機物の「文化財」保存とは何かを問う。

第一章 香薬とその調査 一 正倉院宝物とは 二 正倉院の香薬の調査 三 宝物調査の詳細

第二章 香と香材の調査 一 正倉院の香と香材 二 香道具のこと 三 香薬等で装飾された調度類 四 庫内の香・香材の調査(沈香・檀香・金浅香と黄熟香・白檀・木香・丁香・薰陸・琥珀・合香・香袋・衾衣香・練り香)

第三章 薬物の調査 薬物の現状と調査(麝香・犀角器・阿麻勒・奄麻羅・無食子・厚朴・桂心・人參・大黃・鵝蜜・甘草・胡同等) 没食子之属・草根木実数種・薬塵・防葵と狼毒・獸胆・その他の薬物)

附章 ある蘭方医の薬箱に見る香薬の保存例 一 薬箱とは 二 洪庵の薬箱に見る薬物の保存例(緞綿・將軍・甘草・桂枝・旃那・真根) 三 幕末の製薬剤に見る保存例 四 幕末の大黃製剤壳薬ウルススの分析

第四章 宝物を彩るもの・織布・紙に見る 一 古代の天然色素材 二 染色材の調査(蘇芳・紫藤・茜根・その他の植物性色素料) 銀泥・丹・朱・辰砂・雄黄・密陀僧 三 染色材の保存と劣化 四 包装材としての布帛 五 植物繊維と紙

第五章 香薬の材質調査から保存へ 一 正倉の構造 二 香薬の収納と包装 三 材質調査は保存のため 四 庫内の微小生物の調査 五 保存への提言例 六 文化財(材)の保存とは 七 文化財の理科学調査 八 有機素材からなる文化財の材質調査 九 素材の劣化とその対策 十 調査記録を残す 附 地下埋蔵物の発掘と保存例

附表 正倉院宝物の特別調査一覧／正倉院薬物とその関連年表

▼A5判・四四〇頁／本体一〇、〇〇〇円

よねだ・かいすけ…大阪大学大学院薬学研究科博士課程中退。薬学博士。

# 俳句とス。ペインの詩人たち

マチャード・ヒメネス・ロルカとカタルーニャの詩人

田澤佳子 著

【1月刊行予定】

これまでの研究では、俳句はフランスなどでの広範な流行にかなり遅れて、断続的にスペインに入ったと考えられていた。だが、陸続きのヨーロッパでそのようなことはあり得ない。スペイン語とカタルーニャ語に精通する著者が、俳句という究極の短詩がいかに受容されたかを、当時の文学書はもとより雑誌や新聞、詩人たちの日記や書簡などを渉猟して、こまやかに読み解く。

## 序 章 バスの功罪

### 第一章 俳句受容の玄関口

パリのスペイン詩人たち／ロンドンとスペイン詩人

### 第二章 スペインの三大詩人と俳句

アントニオ・マチャード／ファン・ラモン・ヒメネス／フェデリコ・ガルシア・ロルカ

### 第三章 俳句伝播の拠点「学生寮」

知の最前線としての学生寮／学生寮の母体／俳句と学生寮周辺の人々

### 第四章 「ウルトラリスモ」と「グレゲリア」の役割

「ウルトラリスモ」とは／「ウルトラリスモ」と俳句／ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナと「グレゲリア」

### 第五章 カタルーニャの詩人・文化人と俳句

カタルーニャ語の位置づけ／ハイカイの紹介者ジュゼップ・カルネー／アウジェニ・ドルスの役割／ジュゼップ・マリア・ジュノイと「ハイカイ」／カタルーニャの国民的詩人ジュアン・サルバット・バサット

▼A5判・三三六頁／本体五、〇〇〇円

たざわ・よしこ

一九五七年兵庫県生。大手前大学大学院比較文化研究科比較文化専攻博士課程後期単位取得退学。文学博士。大阪大学・関西大学講師。

# 俳句とジャポニスム

太田靖子 著

メキシコ詩人タブラーダの場合

90年前メキシコにスペイン語でハイクを書いていた詩人がいた。いまだに研究の乏しいホセ・ファン・タブラーダのハイク作品に光を当てて一書。

▼A5判・三二八頁／本体五、八〇〇円

# 翻訳文学の視界

井上健編

近現代日本文化の変容と翻訳言語が自国文化と深く関わる以上、翻訳文学はつねに複雑な要素をばらむ。比較文学・比較文化研究の立場から翻訳文学の諸相を語り可能性を探る。

▼A5判・三〇〇頁／本体二、五〇〇円

# 比較詩学と文化の翻訳

川本皓嗣・上垣外憲 編 大手前大学比較文化研究叢書8

各国から集った研究者の共同論集。詩歌の翻訳から民謡、仏教、獅子舞、ベリシヤの涙壺まで、比較文化と翻訳にまつわる事象を様々に論じる。

▼A5判・二八六頁／本体二、五〇〇円

# 言語のあいだを読む

大澤吉博 著

日・英・韓の比較文学

夏目漱石や、漱石を中心とした日本文学の他言語への翻訳、外から見た日本文学と日本文化、イギリスと世界との関わり、故人の多彩な研究をまとめる。

▼A5判・五五〇頁／本体九、〇〇〇円

# 中国語圏における厨川白村現象

工藤貴正 著

隆盛・衰退・回帰と継続

彼の著作が日本でのような評価を受け、大陸・中国の民国文壇の知識人にもどのように受容されたのか、その特徴とは如何なるものだったのかを考察。

▼A5判・三七八頁／本体六、〇〇〇円

# 没理想論争とその影響

坂井健著

佛教大学研究叢書27

明治三十四年以降、「早稲田文学」と「しがらみ草紙」を舞台に坪内逍遙と森鷗外との間で繰り広げられた「没理想論争」を軸に、明治の文学者たちがイデオロギと現実との関係をもとにどう捉えようとしたのか、またこの論争が文学史にどう影響したのかをたどる。

〔2月刊行予定〕

▼A5判・三六八頁／本体八、九〇〇円

〔内容〕

序章 没理想論とその時代……………

第一章 没理想論成立のころ…宗教の混乱とユニテリアン／第二章「真理」の時代…二葉亭・逍遙・嵯峨の屋など

第二章 世界観と認識論の対立……………

第一章 二葉亭四迷「真理」の変容…仏教への傾倒／第二章 没理想論争の真相…観念論者逍遙と経験論者鷗外／第三章 没理想論と老荘思想／第四章 没理想論争と仏教／第五章 シュヴェーグラー「西洋哲学史」と没理想論争

第三章 揺れていた「想」……………

第一章 観念としての「理想（想）」…鷗外「審美論」における詠語の問題を中心に／第二章「月草」における改稿の意図…逍遙子の諸評語」における異同をめぐって／第三章 没理想論争の発端…斎藤緑雨と石橋思案の応酬をめぐって／第四章 没理想論争の背景…想実論の中で

第四章 没理想論争の影響……………

第一章 高瀬文淵と森鷗外…超絶自然論と「脱却理想論」を中心に／第二章 没理想論争と田岡嶺雲…禅の流行と自然主義の成立／第三章 没理想論争と田山花袋…「野の花」論争における「審美新説」受容の評価をめぐって／第四章 田山花袋と高瀬文淵…花袋のハルトマン受容をめぐって／第五章 鷗外の具象理想美学とその影響…日清戦争後の文壇と花袋と

第五章 鷗外とハルトマン……………

第一章 没理想論争における鷗外とE・V・ハルトマン／第二章 鷗外がハルトマンを選んだわけ／第三章 森鷗外「審美論」と本保義太郎筆録「美学」ノート／第四章 鷗外のサービス精神…本保義太郎筆録「美学」ノートの独自性

さかいたけし…一九六二年新潟県生。筑波大学大学院文芸・言語研究科単位取得中退。筑波大学文芸・言語学系助手などを経て、佛教大学文学部教授。

## オンデマンド復刊事業

スタート!!

・品切れとなっておりました弊社刊行図書の、オンデマンド復刊を順次行つてまいります。  
・左記タイトルを皮切りに、当事業ではアイテムを増やしてまいりますので、ぜひご愛顧を賜りますようお願いいたします。  
・なお受注生産のため、出荷に二週間ほどいただきます。

### 神仏習合の歴史と儀礼空間

嵯峨井建著

〔初版二〇一三年〕

〔オンデマンド版〕

豊富な事例とともに神仏習合の諸形態を丹念にまとめた実証研究

〔11月復刊〕

▼A5判・四二八頁／本体八、六〇〇円

### 近世吉野林業史

谷彌兵衛著

〔初版二〇〇八年〕

〔オンデマンド版〕

吉野林業の光と影を史料に基づいて実証的に明かした画期的研究

〔11月復刊〕

▼A5判・五三八頁



本体一一、一〇〇円

### 明治博物館事始め

椎名仙卓著

〔初版一九八九年〕

〔オンデマンド版〕

「正史」からはこぼれがちなエピソードを通して明治という時代を描く

〔11月復刊〕

▼四六判・二六八頁／本体四、八〇〇円

——思文閣グループの逸品紹介——

# 美の縁

び

よすが



## ◆ SOL110 ◆ コンラッド・ヨン・ゴードリー

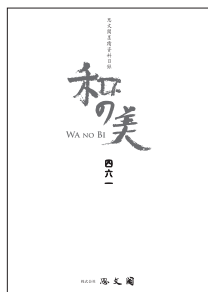
コンラッド・ヨン・ゴードリー氏は、美しいアルプス山脈を臨むスイスの街に生まれ、四十代から本格的に油彩画家としての活動を始めた。彼が主な画題とするのは、幼い頃から親しんでいたアルプスの山々である。

ゴードリー氏の作品は遠くから見ると非常に写実的である。しかし、近づいて行くと、山の積雪や岩肌が実はいくつもの刷毛目であることがわかる。一般的に、写実的な作品というと時間をかけて細かく描くものだと思うわれがちだが、彼の作品は一气呵成な筆遣いで、短時間に描かれている。まるで写真のように見える作品は写実ではなく、ゴードリー氏の心に強く焼き付けられた山の姿なのである。

高い精神性を込め、一度きりの筆使いで制作された作品は、画材は違えど日本の書や山水画と通ずるところがある。ゴードリー氏自身は日本画を専門的に学んだ経験はないが、自身の画集冒頭に「村上華岳に捧げる」と記すほど日本の美術に深い関心を寄せており、作品を飾ってみると和の空間にもよく似合う。日本人の心を不思議と強く惹きつけるゴードリー氏の作品を、ぜひ実際にご覧いただきたい。（ぎやらいい思文閣・井上智草）

思文閣墨蹟資料目録

# 和の美



古書画から  
近代美術まで  
毎月100点の名品を  
通信販売にて  
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355  
**TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533**  
<http://www.shibunkaku.co.jp/>  
[info@shibunkaku.co.jp](mailto:info@shibunkaku.co.jp)

## 思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年4回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



源氏物語画帖  
全一帖

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355  
**TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155**  
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>  
[kosho@shibunkaku.co.jp](mailto:kosho@shibunkaku.co.jp)

大切な品を、  
大切にしてくれるひとへ

美術品、納得のご売却をお手伝い

創業70余年  
長年の実績

確かな  
審美眼

多様な  
売却方法

無料査定

まずは査定のお申込みを

■「査定・買取り申込フォーム」

[www.satei.shibunkaku.co.jp](http://www.satei.shibunkaku.co.jp)

■「美術品査定申込アプリ」



美術品査定

SHIBUNKAKU  
思文閣

〒605-0089

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355  
tel: 075-531-0001 [satei@shibunkaku.co.jp](mailto:satei@shibunkaku.co.jp)



ぎやらりい思文閣では、絵画・陶芸など  
様々な展覧会を開催いたします。  
皆様のお越しを心よりお待ち申し上げます。

ぎやらりい思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 386  
TEL(075)761-0001 [gallery@shibunkaku.co.jp](mailto:gallery@shibunkaku.co.jp)  
[www.shibunkaku.co.jp/gallery/](http://www.shibunkaku.co.jp/gallery/)